

授業科目：	健康教育プログラム論		
科目区分：	健康科学科専門科目	受講者数：	7名
担当者：	森脇 弘子（人間文化学部健康科学科）		
アクティブ・ラーニングのタイプ：	行動型 ・ 参加型 ・ 複合型（※行動型・参加型ALを組み合わせて実施）		
キーワード（具体的なAL手法等）：	学外授業，地域で高齢者対象の料理教室を学生が実施		

## 1. 授業の概要と目標

概要は、「地域や集団が抱えている健康・栄養問題及び影響を与えている社会や環境要因を分析し、ヘルスプロモーションの理念に基づく適切な健康教育プログラムを計画・実施・評価するための知識と技能を学ぶ。その基礎として、健康教育の理念，保健・医療対策，保健行動，健康教育の方法と媒体などについて学ぶ。学外授業を通して健康教育の具体的な方法を体験的に学ぶ。」（シラバスより引用）である。

目標は、「①健康教育は、健康とQOLの向上に寄与するという認識を持ち、人々が自らの健康をコントロールし、自己決定し、行動をとることが可能となるプロセス（ヘルスプロモーション）を支援する役割があることを理解する。②健康・栄養状態，健康・食行動，食環境等の評価・判定に基づき、健康教育プログラムの作成・実施・評価の総合的なマネジメントに必要な理論と方法を理解し、実践する。」（シラバスより引用）である。

## 2. アクティブ・ラーニング導入の具体的な流れ

○科目名 健康教育プログラム論 第12・13回 授業テーマ「健康教育プログラムの実施」

- 1) 場所（実施月：学生の人数）：A会館（8月：3名）／B公民館（9月：4名）
- 2) 参加者：高齢者自主グループ料理教室参加者 9名／16名
- 3) 本時の目標：これまで学んだ理論・方法をもとに地域住民を対象に健康教育プログラムを実施する。実施後，課題をみつけ，改善案を考える。

段階	指導過程・学修活動	指導上の留意点（工夫）	評価方法
導入 30分	1 本授業の目標と予定の確認  2 食材の分配，器具の準備	学生に本時の目標を理解させる。 参加者の代表と打ち合わせをする。 衛生面に配慮する。	
展開 120分	【学生が講師になり、「しっかり噛んで口腔機能向上」をテーマに料理教室を実施】以下は学生の指導過程 1 挨拶と自己紹介 教室への思いなど 2 今日の予定 3 調理の説明 4 衛生管理ポイント 5 調理開始 各台で調理指導を行う	レシピを配布する。 教室の意義について話す。 要点を掲示する。  衛生面（手洗い・冷蔵品の常温放置），安全面（調理台の整理整頓）に注意	観察（行動，発言内容）

	6 健康教育 1 唾液腺マッサージについて実演 7 試食 8 健康教育 2 口腔機能について説明・実演 9 片付け 10 参加者へのアンケート調査 11 教室のまとめ	する。 参加者から生活状況を聴き取る。 要点を掲示する。  参加者に本時の目標や家庭での実践，自主的な活動の重要性を伝える。	アンケート結果
まとめ 30分	1 教室で得たこと・反省・改善案  2 次回までの課題の確認 アンケート集計，報告書の作成	学生の進行のもと，すすめる。各人の発表と要点をしばり改善案を考える。	観察（発言内容） 振り返りシート

### 3. 成果・効果

授業全体の評価は、学生からの授業アンケートの結果より、授業外の学修、能動的学習機会が高評価であった。学生の報告書より、「健康教育プログラムの企画・実施・評価の一連の流れを行い、主体的に運営に取り組むことができた。これまでの学内の学修では、学んだ知識を異なる世代の方に伝える経験がなかったため、わかりやすく伝える方法を考えることに大変苦労した。また、健康教育などの実践を行い、これまでの学びを深めることができた。食を通じて地域の高齢者の方々と交流を行い、食習慣や生活背景をうかがうことができた。また、地域住民から管理栄養士に求められることを知ることができ、学内の学びでは得られない貴重な体験の場となった。したがって、今後もこのような料理教室の参加を続けていきたい。」とまとめていた。

本時のまとめでこの教室で得たことわかったことについて話してもらった。料理・調理指導については、「調理技術が個人によって異なるため、個人に沿った指導が必要」「参加者が調味料を分量外に加えていたが、減塩について説明すべきだった」などの意見があった。健康栄養教育については、「相手に聞き取りやすい声を意識した」「クイズなど参加型にして、参加者の反応がわかった」などであった。自主的な教室運営については「当番制や役割分担をされていた」「支援者と相談されていた」「料理教室のみでなく、地域の活動をやっている方が多かった」などであった。

以上のように、自ら積極的に取り組む主体性、目標に向かって課題をみつけ解決を提案できる課題発見力、学生間や地域住民への対話を通じて自分の意見をわかりやすく伝える発信力、相手の意見を引き出す傾聴力、相手の意見や立場を尊重し理解する柔軟性が養われたと考える。

### 4. 課題

授業の第7回「模擬教室」で3名の教員に授業参観をいただいた。その時の参観シートから、次の2点が課題だと感じた。1点目はグループワークの際、学生の自主性を尊重し、できるだけ介入しないようにしていたが、グループワークの目的を学生に示すことやポイントを絞って介入すべきだった。2点目は2グループにわかれて模擬教室を行う際、学生に自由に観察させたが、片方のグループにフィードバックの方法を具体的に示す必要がある。次年度へ向け、改良したい。

### 5. 資料

学生が本時のアンケート調査結果についてまとめた資料を添付する。

# 高齢者料理教室参加者からの教室評価

## — 健康教育プログラム論の学外授業 —

県立広島大学人間文化学部健康科学科 3年

健康教育プログラム論受講者 7名

### 1 目的

高齢社会が進展する中、できるだけ長い期間、地域で元気に暮らすために地域の自主性や主体性に基づき、地域特性に応じた介護予防を作り上げていくことが必要とされている。H市M区では、各中学校区に一つずつ、低栄養予防や会食の場の確保を目指した男性高齢者の自主的な料理教室が立ち上がり、月に1回開催されている。各教室へ1年に1回、大学生が講師となり、献立作成、調理指導、健康教育を行い支援している。

そこで、各地域で高齢者が自主的に行っている料理教室において、参加者の実態および大学生が実施した教室の評価を調査し、よりよい教室運営の資料とすることを目的とする。

### 2 方法

#### 1) 対象者

高齢者料理教室参加者 25名中23名回収(回収率92%)

#### 2) 時期 (場所と人数)

平成30年8、9月(A会館 9名, B公民館 16名)

#### 3) 方法

料理教室終了後、留め置き法無記名自記式アンケート調査

#### 4) 料理教室の概要

口腔機能向上を目標に、噛みごたえのある料理献立を作成し、調理指導をした。また家庭で実践できる健康教育を行った。



図1. 料理教室の様子

(左上:料理中の様子 右上:実際に作った料理  
左下、右下:健康教育中の様子)

### 3 結果

#### 1) 作成した料理について

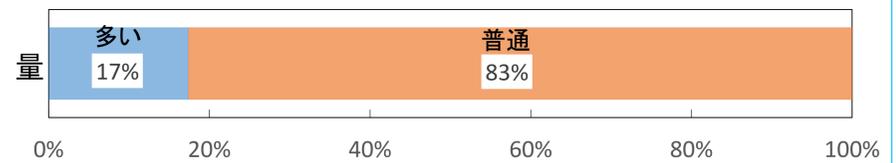


図2. 量

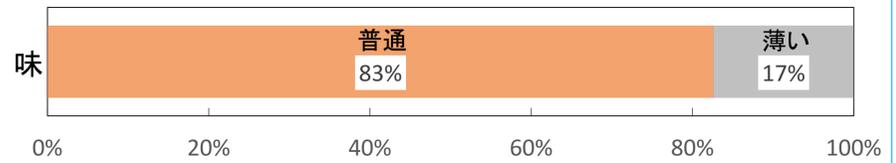


図3. 味

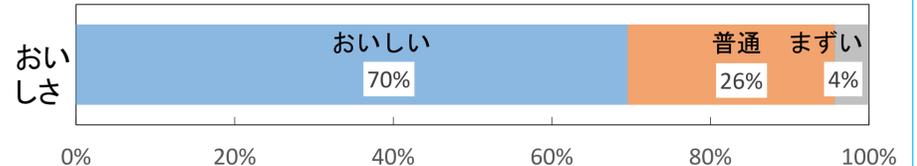


図4. おいしさ

#### 2) 健康教育について



図5. 話の聞き取りやすさ



図6. 掲示物の分かりやすさ



図7. 理解できるか

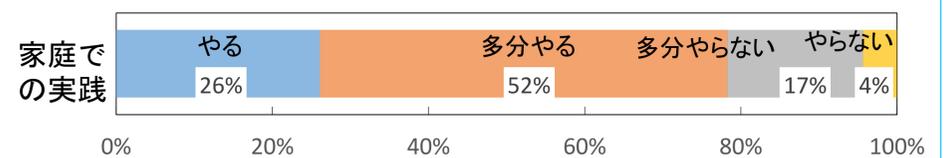


図8. 家庭での実践

#### 4) 学びたい健康教育の内容

表2. 学びたい内容(上位5位)

栄養のバランス	23.1%
高齢期の食事	20.5%
高血圧症予防の食事	12.8%
骨粗鬆症予防の食事	12.8%
飲酒	10.3%
災害時の食事	10.3%

#### 3) 作りたい料理

表1. 作りたい料理(上位5位)

普段食べられないもの	21.4%
手の込んだもの	14.3%
普段食べるもの	11.9%
中華料理	11.9%
簡単なもの	11.9%

### 4 まとめ

管理栄養士を目指す学生がH市M区内で高齢者料理教室を実施し、教室参加者の教室の評価を調べた。今回は口腔機能向上をテーマに、献立作成、健康教育を行った。献立作成は、学生が高齢者の食生活や嗜好を想像しながら考案した。料理の評価は、おいしいと回答した人が多かった(70%)。また、参加者の作りたい料理は「普段食べられないもの」「手の込んだもの」であった(表1)。健康教育は、参加者の理解度も高く(96%)、教育内容の家庭での実施への意欲も高かった(78%)。また、参加者は口腔機能向上以外にも、「栄養バランス」や「高齢期の食事」に関心があることが分かった。学生による高齢者料理教室の実施は、健康教育のテーマに沿った献立と教育により、参加者の健康づくりへの関心を高める効果があることが示唆された。今後も料理教室を行い、参加者の行動変容の有無を調べるとともに、地域住民の健康づくりを支えていきたい。

授業科目：	地域マネジメント論		
科目区分：	経営学科専門科目	受講者数：	42
担当者：	和田 崇（経営情報学部経営学科）		
アクティブ・ラーニングのタイプ：	行動型 ・ <b>参加型</b> ・ 複合型（※行動型・参加型ALを組み合わせて実施）		
キーワード（具体的なAL手法等）：	ミニッツペーパー，意見表出とそれに対するコメント		

## 1. 授業の概要と目標

本授業は、「地域社会が持つ潜在力と内発的な力を組み立てることにより，身近な居住環境を改善し，まちの活力と魅力を高めようとする「まちづくり」の考え方と実践方法を教授する」ものであり，対面形式で実施している。

## 2. アクティブ・ラーニング導入の具体的な流れ

○科目名「地域マネジメント論」 第6回 授業テーマ「まちづくりと地方創生」

段階	指導過程・学修活動	指導上の留意点（工夫）	評価方法
導入 10分	前時（まちづくりのプロセス）に出された質問に対する回答（フィードバック）（7分） 本時の目標の説明（3分）	質問への回答を通じて，前時の内容を振り返り，深化・定着させる。	
展開 70分	「地方創生」の政府定義の説明（5分）  「地方創生」をめぐる議論の説明（20分） 増田レポート（推進派） 山下レポート（懐疑派）  「地方創生」と「まちづくり」の共通点・相違点の説明（10分）  「地方創生」に関する新聞記事紹介（5分）  <b>意見記入</b> 増田レポート，山下レポート，新聞記事を踏まえ，「地方創生」に対する各自の意見をミニッツペーパーに記入・提出（10分）	1つの社会事象・政策に対して異なる立場・捉え方があることを説明する。  異なる2つの見方を偏りなく紹介したうえで，自分の意見を自由に記入してもらう。	意見の内容・熟度に応じて平常点（2点/回）をつける。
まとめ 10分	本時の活動の振り返り（10分） 学生が記入した意見をできるだけ多く紹介し（匿名で読み上げ），それらに対して教員が適宜コメントする。	学生によっても多様な意見が存在することを認識させるとともに，コメントを通じて当該問題をより深く考えさせるように努める。	

### **3. 成果・効果**

ミニツツペーパーをみると、ほぼ全員が用紙全体を使って意見を記入していることから、本時のテーマについて問題意識をもって講義を聴き、意見表出に参加していることがうかがえる。また、学生自身の居住地や日常生活など身近な話題を盛り込みながら、本時のテーマについて意見を表出していることから、「まちづくり」や「地方創生」を自らの問題として捉え、主体的に考えていることがうかがえる。

### **4. 課題**

積極的な意見表出が得られたので、次回の授業で、本時授業で紹介できなかったいくつかの意見をスクリーンに映しながら紹介した。しかし、時間の都合から、すべての意見を紹介することができなかった。来年度以降は、出された意見をもとに、「地方創生」の推進派と懐疑派に分かれてディベートを行うことも考えられる。

### **5. 資料**

プリント、新聞記事、ミニツツペーパー（本学所定の出席カード）

授業科目：	管理会計論		
科目区分：	経営学科専門科目	受講者数：	41名
担当者：	足立 洋（経営情報学部経営学科）		
アクティブ・ラーニングのタイプ：	参加型		
キーワード（具体的なAL手法等）：	グループディスカッション，ケーススタディ，レポート課題		

## 1. 授業の概要と目標

本授業の目標は、「経営活動の管理が会計情報を用いながらどのように行われているのかについて、基本的な理解をはかること」（シラバスより引用）であり、対面形式で実施している。

## 2. アクティブ・ラーニング導入の具体的な流れ

○科目名「戦略会計論」 第8回 授業テーマ「損益計算書による収益力の分析」

段階	指導過程・学修活動	指導上の留意点（工夫）	評価方法
導入 10分	前時の内容の振り返り（5分） 本時の目標の理解（5分）	本時の学修の流れと目標を理解させる。	
展開 70分	基本事項の説明（30分）  個人学修（15分） 学生が比較的身近に感じられると思われる企業の財務諸表を配布。基本事項に出てきた経営指標を計算させる。 指名回答を交えながら解説  グループワーク・発表（25分） 先ほどの計算結果に基づいて、その企業の経営戦略の特徴を、ポーターの競争戦略の分析フレームワークなどを用いて分析させる。 分析内容は指名回答を交えながら総括	机間巡視を行い、ワーク上での疑問点について適宜説明 発表内容を肯定的に受け入れ、決して否定的なことを言わない。適宜補足説明を行う。	
まとめ 10分	本時のグループワークの総括（5分） 基本事項で出てきた経営指標の意味と分析方法に関するおさらい  コメントカードの記述・提出（5分） 本時の講義内容への感想、あるいは質問を書いて提出させる	本時の学修全体を振り返らせる。	講義内容をよく聞いていた学生のカードは高評価。また、講義担当者は質問への回答をコメントし、次回の講義で全学生に返却

### **3. 成果・効果**

授業の総合的な満足度(3.30)からして、講義運営については一定の成果を得たと考えている。特に、毎回のコメントカードの内容を確認する中で、会計学が経営戦略の分析と強く結びついていることを本講義で理解し、印象付けられたという感想が寄せられることが多い。この点は、ケース・スタディの方法を採用し、実際の企業の財務諸表分析を学生自身が手を動かすことによって実践する機会を提供している(前述の「計算」「グループワーク」の時間)ことが大きな成果を生み出していると考えている。

### **4. 課題**

授業外学修時間が比較的少ないと認識している学生は前年度よりも割合が減少したもののまだ依然として少なくないと考えられる(2.40)。今年度は、課題については何回かに一回の授業で提示し、数週間をかけて完成・提出させるようにしていたが、一回の課題の量を少なくしてでも、もう少し課題を頻繁に与えることを検討していきたい。

### **5. 資料**

添付資料は特になし

授業科目：	情報システム実験		
科目区分：	経営情報学科専門科目	受講者数：	2年生，47人（2018年前期）
担当者：	肖 業貴（経営情報学部経営情報学科）		
アクティブ・ラーニングのタイプ：	行動型 ・ 参加型 ・ <b>複合型</b> （※行動型・参加型ALを組み合わせて実施）		
キーワード（具体的なAL手法等）：	グループワーク，ディスカッション		

## 1. 授業の概要と目標

本実験は、「情報処理論」「情報システム論」「コンピュータ概論」等の一連の講義との関連において行なわれるもので、ハードウェアとソフトウェアの両方を体験させると共にそれらの基礎を身に付けることを目的とする。具体的実験内容は次のとおりである。

- (1) PC分解・組み立てによるハードウェア体験
- (2) アプリケーション等のインストールと活用
- (3) デジタル情報システムの基礎（プログラミングの演習を含む）

## 2. アクティブ・ラーニング導入の具体的な流れ

○科目名 「情報システム実験」

段階	指導過程・学修活動	指導上の留意点（工夫）	評価方法
導入	第1回： <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 班分け（責任体制の構築）               <ul style="list-style-type: none"> <li>・班長：班の実験を統括する（作業者決め，進捗管理，実験器具管理等）</li> <li>・書記：指導書による実験内容の確実な実行と適切な進度の管理（班長の采配により書記の変更が可能）</li> </ul> </li> <li>2. インセンティブの明確化 成績評価方法を説明し，責任を全うした者に対して成績に加点することを付け加える。</li> <li>3. デモの実施 PCをセットし，動作確認を行い，分解作業の説明を行う。最後に実験の注意点を説明する。</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生の自主性を尊重し，班ごとの実験体制を組ませること。</li> <li>・過去の加点実績を紹介し，やる気を刺激する。成績評価の透明性を確保する。</li> <li>・丁寧に作業することは実験を成功させる最大のポイントであることを，デモを通じて分からせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・班長と書記を名簿に記録し，それぞれの責任を明確化する。</li> </ul>
展開	授業全般にわたってTAによる学習支援を実施する。  第2回～第8回 <ul style="list-style-type: none"> <li>・PC分解作業               <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 動作確認後，サイドパネル，フロントパネルを外す。配</li> </ol> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・毎回，前回の授業内容に言及し，当日の内容のポイントを中心に，作業開始前に説明する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・毎回記録を取り，成績評価の素材を確保する。</li> </ul>

	<p>線とモジュールのピン配置を確認する。</p> <p>(2) 主要な部品 (HDD, DVD, CPU ファン, CPU チップ, グラフィックスボード) を分解する。</p> <p>・ PC 組み立て作業</p> <p>(1) 分解手順と逆の手順で主な部品を組み立てしていく。</p> <p>(2) サイドパネル, フロントパネルをはめ込む。</p> <p>・ 動作確認</p> <p>(1) 分解作業の時と同じように PC を設定し, 所定の動作確認を行う。</p> <p>(2) 動作確認ができない場合は組み立ての一部または全内容のやり直しを行う。</p> <p>(3) 動作確認が無事に終わった班に対して事前に準備した問題を提示し, PC への理解を深めさせる。</p> <p>第 9 回 : 小テスト実施 PC 分解・組み立ての学習効果を確認するためにテストを実施。</p> <p>第 10 回～15 回 ・ ソフトウェア・インストールの体験学習 (MATLAB 基本モジュール)</p>	<p>・ 班長が統括できるようにその責任の重要性を毎回確認する。</p> <p>・ 作業者の交代を促し, 班員全員が体験を獲得できるように体制を確認する。</p> <p>・ 指導書をよく読んで, 班員同士で互いに確認しながら, 作業させる。また組み立てのことを意識しながら作業させる。</p> <p>・ 分解の作業中に指導書に示している質問等を班全員で答えを探し, 共有する。</p> <p>・ 組み立て後の動作確認が失敗した場合は, ヒントを与え, 自ら原因の特定につとめてもらうようにする。手を出さないように <u>最大限に我慢すること</u> が最も重要である。うまくいかない場合は <u>手出しを最小限にとどめる</u> ようにする。</p> <p>・ テストの正解を公表し, 学習効果の向上を図る。9 点 (10 点満点) 以上の成績を収めた学生を公表し, 後半の学習への動機づけを行う。また, 5 点以下の成績しか取れなかった学生に対して名前を出さず, 人数のみを公表し, 授業への積極的な参加を強く促す。</p> <p>・ インストールと削除をセットで行わせる。</p> <p>・ MATLAB の基本コマンドとプログラミングの基礎を学習させた後一部のプログラムを作成させる, または配信して, 体験学習を行う。</p>	<p>・ 動作確認の成敗について班ごとにチェックを行う。</p> <p>・ 小テストの成績 (最高点, 最低点, 平均点, 学習の差を測る問題に対する得点率)</p> <p>・ プログラムの実行結果を確認させ, できなかった学生に対して TA と一緒にフ</p>
--	---	---	---



授業科目：	情報システム論		
科目区分：	経営情報学科専門科目	受講者数：	48名
担当者：	折本寿子（経営情報学部経営情報学科）		
アクティブ・ラーニングのタイプ：	行動型 ・ 参加型 ・ 複合型（※行動型・参加型ALを組み合わせて実施）		
キーワード（具体的なAL手法等）：	企業訪問，アンケート		

## 1. 授業の概要と目標

この科目は、学科専門科目における情報処理系科目の一つとして、ソフトウェア開発の側面から情報処理手法について学ぶことを目的とする。具体的には、「情報」と「システム」に対する概念を学び、システム及びビジネスワークフローを明確にし、システム構築を行う技術を身に付けることを目標とする。

## 2. アクティブ・ラーニング導入の具体的な流れ

○科目名「情報システム論」

段階	指導過程・学修活動	指導上の留意点（工夫）	評価方法
導入 （授業外）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・企業訪問先の事業内容のリサーチ</li> <li>・同業他社との比較（観点：ターゲット層，企業戦略，提供事業）</li> <li>・当該科目での学修内容が活かされている技術，およびそのように考えた理由を考える</li> </ul>	観点を明らかにし，自分の置かれている立場から世の中に出ているサービスとの関連性を自ら見つけられる質問を行う（授業内にて実施）	レポートにて評価
展開	企業訪問を実施（90分） <ul style="list-style-type: none"> <li>・事業内容のヒアリング</li> <li>・システム開発の具体的な流れの学修</li> <li>・サービス提供しているシステムの体験（AI関連，サーバ室見学）</li> <li>・質疑応答</li> </ul>	必ず一つ質問を行うように指導	
まとめ （授業外）	活動の振り返り <ul style="list-style-type: none"> <li>・訪問先企業の事業内容で興味を持った物について考える</li> <li>・当該科目での学修が活かされている技術，およびそのように考えた理由を考える</li> <li>・訪問したことにより得られた知識，視点，観点を考える</li> </ul>	導入時と訪問後の意識の違いについて，キーワードの提供を行う（授業内にて実施）	レポートにて評価

### **3. 成果・効果**

「システム開発」の言葉を実社会で運用している開発現場を体験することにより、言葉の理解ではなく体感的に感じ取ることができた。訪問前は、物づくりであるプログラミングに興味がある学生が多かったが、企画、設計で検討すべき「どのようなシステムを作るべきか」、「どのような部分を不便と感じていてどうすれば快適になるのか」といった観点を持ち、興味を持った学生が増えた。その結果、将来のビジョンを明確でき、どのような学修が必要であるかが分かったと感じた学生が多くいた。

### **4. 課題**

導入時に企業研究をしているが、実際に話を聞いて質問できる学生が少なかった。導入時に、質問内容まで書かせ企業訪問を行い、まとめて疑問と思った内容の回答を提出させることで、より興味深く話を聞くことができると思った。

### **5. 資料**

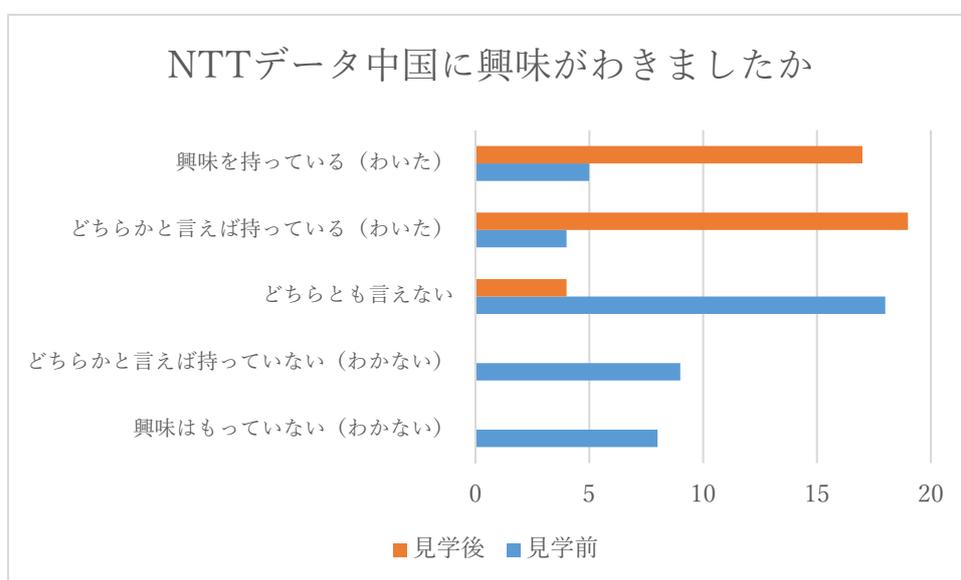
アンケート結果

## 行動型学修のアンケート結果

実施日 2018年7月19日(木) 13:30~16:00  
見学先 NTT データ中国  
内容 会社概要, ソリューション (Winactor) の紹介, データセンタビジネスの紹介・見学  
参加者 県立広島大学 経営情報学科2年生47名, 経営情報学科3年生1名,  
経営情報学科4年生1名, 経営マネジメント専攻1年 1名, 教員 2名

以下の項目について意識調査を実施 (事前:回答者44名, 事後:回答者40名)

1. (事前) NTT データ中国に興味がありますか  
(事後) NTT データ中国に興味をわきましたか

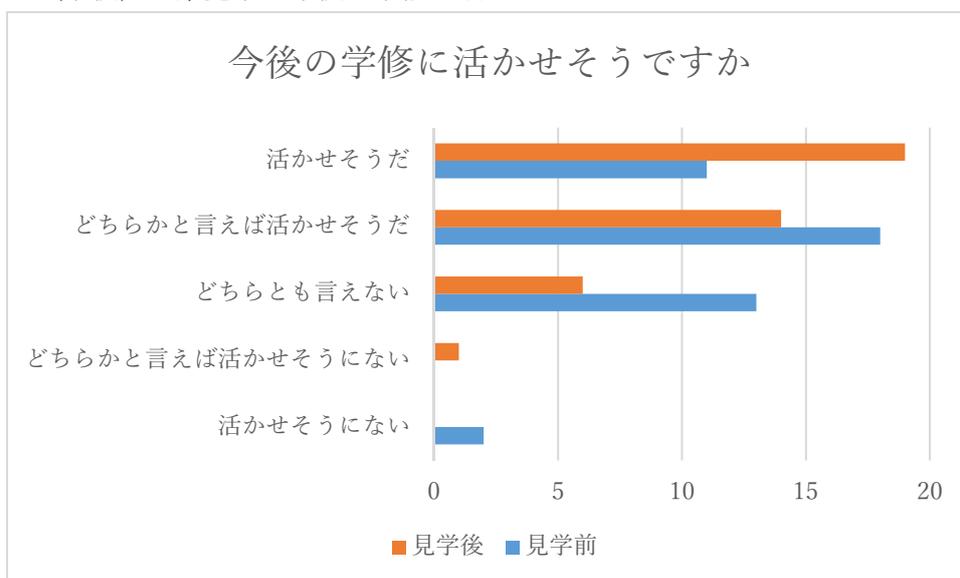


### 興味を湧いた内容

- ・ AI によって人間が行っていた仕事を代わりにこなして、人間に比べてミスもなく早くこなせる AI に驚いた。今後人間の仕事がどんどん減っていくのではないかと感じたから
- ・ 定型作業を自動化し、コスト削減や記入ミスの削減につながる RPA の概念と、その実行のためのツールである WinActor (多数回答)
- ・ そんなにプログラミングができなくても働いている人がいたこと。アロハという軽装で出勤していること。
- ・ システム構築の上流から下流まで全ての工程を経験できるという点が非常に魅力的だと感じた。
- ・ システム開発後の運用と保守について
- ・ 仕事内容とかを具体的に示れたから興味を湧いた

- ・NTT データ中国がどのような業務を行っているか知ることができ、企業や法人などに対しシステムの提供を行っていることに興味を湧いた。
- ・他社企業との共同開発をしていた点
- ・会社の雰囲気を知ることができた
- ・広島県とコラボした、働き方改革のための「どこでもワーク」
- ・職場見学

2. (事前) 企業見学をすることによって、今後の学修に活かそうですか  
(事後) 企業見学は今後の学修に活かそうですか



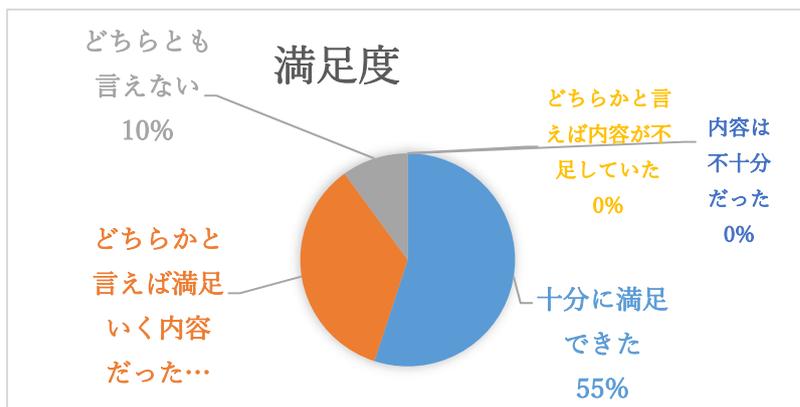
#### 学修に活かせると思った理由

- ・IT は金融、法人、公共と色々な分野に関連し、繋がっているということ。
- ・いま授業で行なっていることが実際に仕事につながることを知ったことが、今後のやる気に繋がりそう。
- ・キリンビール×NTT データで、ビールサーバーにシステムを設置し、ビールの洗浄状況や、ビールの出た数などを把握させるようにすることで、効率化だけでなく業務の改革も行おうと聞いた時、課題の解決だけでなく、より良くという点が、今後学修していく際に新たな視点として活かそうだと感じた。
- ・システム開発の流れが学習したことを同じで、勉強したことが将来活かせることがわかったので、今後より一層情報分野を学んでいこうと思った。また IT の会社においても情報分野だけでなく様々な知識が必要であると分かったので、情報分野以外の授業もまじめに勉強していこうと思った。
- ・医療現場や民間企業における情報伝達システムの実例を知り、適切なデータ活用は現場の支援につながることを学ぶことができ、情報システムの役割についてヒントを得た
- ・実際システムエンジニアがどのような仕事なのかを知ることができたので、将来働く自分

の姿が見えてイメージしやすくなった。

- ・将来のビジョンが見え、どのような学修が必要か分かること
- ・将来の就職活動へのモチベーション向上（多数回答）

### 3. 企業見学は、満足いく内容でしたか



- ・ IT 会社はどんな仕事をしているのか全くイメージが湧かなかったので、どんな雰囲気なのか何をしているのかがとてもよく分かった。スライドで説明して頂いてとてもわかりやすかった。
- ・ よりリアルな仕事風景が見え、2年後の自分はどうなっているのか、また何がしたいのかをもう一度考え直すいい機会になった
- ・ システムの開発から運用、保守まで、さまざまな事例を用いて丁寧に説明をしていただき、その流れや新しい知識も得られるなど、充実していたと思う。
- ・ 人々が優しかった。
- ・ 企業を見学するのは初めてだったが、すごく丁寧に説明していただいて、SI 業界にすごく興味が湧いた。
- ・ 入ることのできない部分に入ることができ、会社を具体的に知ることができた。
- ・ 実際にどのような仕事をしているかを知ることができたこと。
- ・ 実際にサーバーをみることができ、実際に働いている方々から1日の業務の流れなどを教えていただけたこと。
- ・ 自分たちが今学んでいることが、仕事の面でどのように活用されているのか知れて良かった。
- ・ 自分のイメージとの違いを知れたこと。
- ・ 説明だけでなく、見学もできてとても学習できた。

授業科目：	統計学		
科目区分：	全学共通教育科目（教養・自然）	受講者数：	137名
担当者：	富田哲治（経営情報学部経営情報学科／総合教育センター）		
アクティブ・ラーニングのタイプ：	行動型 ・ <b>参加型</b> ・ 複合型（※行動型・参加型ALを組み合わせて実施）		
キーワード（具体的なAL手法等）：	スマートフォンを利用した参加型学修		

## 1. 授業の概要と目標

統計学の考え方や手法に関する知識は多くの分野において必要とされています。本講義では、データをどのように整理し、その特性をどのように捉えていくかを、具体的なデータを利用しながら理解することを目標（シラバスから引用）とし、対面形式に加えて適時ソフトウェア演習を組み合わせて実施している

## 2. アクティブ・ラーニング導入の具体的な流れ

○科目名「統計学」 第4回 授業テーマ「量的な2変数データの要約」

段階	指導過程・学修活動	指導上の留意点（工夫）	評価方法
導入 15分	(1)これまでの講義内容をチェックするためのウェブテストと本時で利用するデータの収集（3分） (2)受講者の理解度を可視化（2分） (3)理解度の低い事項の説明（5分） (4)(1)で収集したデータを使って本時の概要を説明（5分）	スマートフォンを利用して理解度チェックテストを実施した結果をその場で可視化して理解度を受講者間で共有。受講者から集めたデータを使って身近な例として本時の目標を理解させる。	ウェブテストを使ったチェックテスト
展開 60分	基本事項の説明と講義内容の演習（40分） 統計ソフトウェアを利用した分析デモ（20分）	導入(1)で集めたデータを利用して、適時、分析デモを実施することで、身近な話題であることを意識させる。  受講者にある数学公式という意識から、統計学は課題解決のための道具であると認識できるよう、適時、分析デモを実施。	
まとめ 15分	本時の内容の振り返り（8分） 本時の理解度チェックのミニテスト（プリント）の実施	本時の講義内容を確認し、理解度セルフチェックのための演習を実施。	提出されたミニテストで評価

### **3. 成果・効果**

導入時にスマートフォンを利用したウェブテストを実施することで、受講者の理解度をすぐに把握することができる。また、理解度を可視化した統計グラフを提示することで、受講者ごとに自身の理解度のセルフチェックになることが期待される。一方、まとめ時における本時の理解度チェックのためのミニテストは、時間外学修の課題としてプリントで配布し、次回の講義前に提出するスタイルにしている。ピアレビューで他の FDer の先生方のコメント得たところ、「前回の課題（宿題）を授業開始前に提出させ、前回の復習をクイズ形式で行い、その後、本時のねらいを明確化し、具体的内容に入るといった授業パターンがしっかり定着しているように見受けられました。課題を授業開始前までに提出させるというルールは、遅刻者の軽減につながると思います。実際、1限目の大人数授業であるにもかかわらず、遅刻者は2名だけでした。」とあった。

### **4. 課題**

大きな講義室における 100 名を超える受講者の講義であるため、教室内の秩序維持が課題になる。ピアレビューによる他の FDer の先生方のコメントによれば、講義開始時に講義室の後ろの席で私語をしている受講者が若干いたとの報告があった。また、受講者から集めたデータを使った分析演習を講義内で受講者に実施したいところであるが、演習にはソフトウェアが必須であるが、受講者数が多いため、演習室の利用が難しいのが現状である。そのため、ソフトウェア演習もスマートフォンで実施できるようなウェブアプリを開発して利用するなど、さらに工夫を重ねていきたい。

### **5. 資料**

PDF ファイル 3 点

- (1) 理解度チェックテスト（ウェブテストの画面）.pdf
- (2) 理解度を可視化した統計グラフ.pdf
- (3) 受講者から集めたデータ.pdf

# 統計学 第4回 理解度チエック

\*必須

性別 \*

女性

男性

身長 (cm) \*

回答を入力

体重 (kg) \*

回答を入力

Q1 : 各変数について対応するデータの種類の答えなさい

	間隔尺度	順序尺度	名義尺度	比例尺度
体重	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
血液型	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
気温	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
性別	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

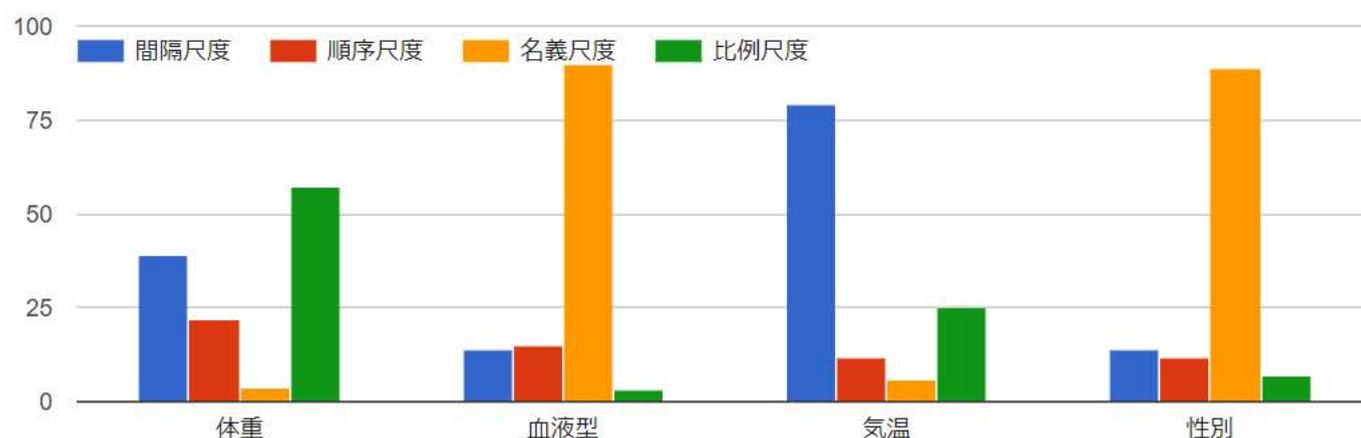
Q2 : 各値の統計値の種類を答えなさい \*

中心の統計値

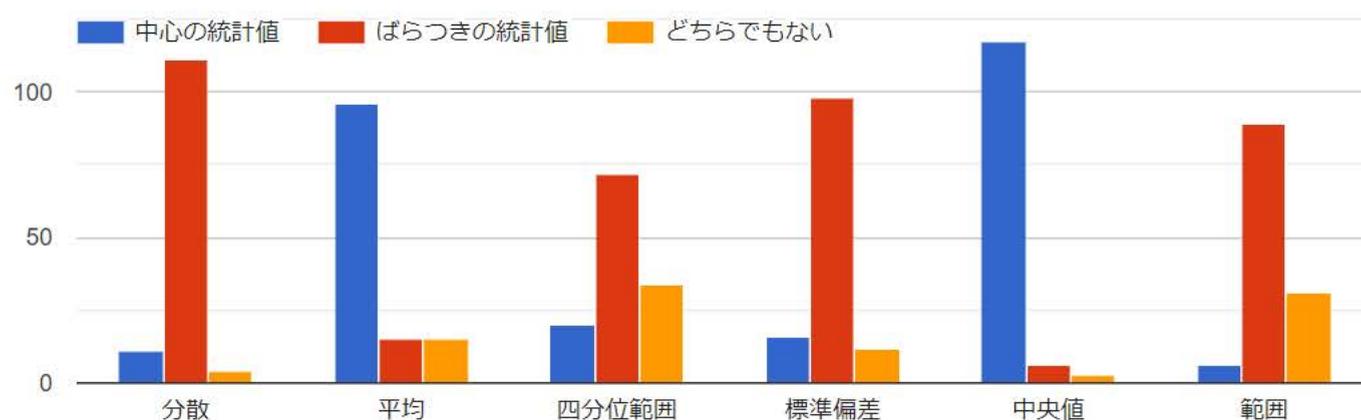
ばらつきの統計値

どちらでもない

Q1：各変数について対応するデータの種類の答えなさい

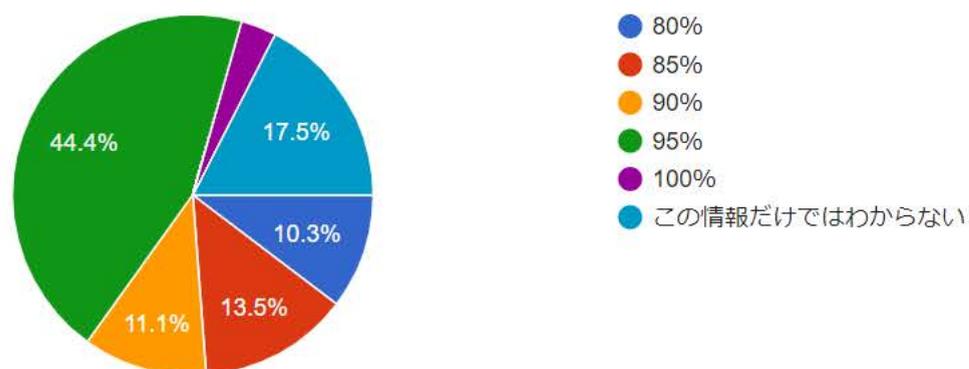


Q2：各値の統計値の種類を答えなさい



Q3：データが正規分布に従うとき、「平均±2×標準偏差」の範囲にあるデータのおよその割合を答えなさい

126 件の回答





fx 2018/10/17 9:08:05

	A	B	C	D	E	F	G	H
1	タイムスタンプ	性別	身長 (cm)	体重 (kg)	Q1: 各変数について対応	Q1: 各変数について対応	Q1: 各変数について対応	Q1: 各変数について対応
2	2018/10/17 9:05:42	男性	177	54	間隔尺度	順序尺度	比例尺度	名義尺度
3	2018/10/17 9:06:03	男性	170	46	間隔尺度	間隔尺度	間隔尺度	間隔尺度
4	2018/10/17 9:06:04	女性	153	45	比例尺度	間隔尺度	名義尺度	順序尺度
5	2018/10/17 9:06:15	女性	154	50	順序尺度	名義尺度	比例尺度	名義尺度
6	2018/10/17 9:06:19	男性	163.7	61	間隔尺度	順序尺度	比例尺度	名義尺度
7	2018/10/17 9:06:24	女性	164	54				
8	2018/10/17 9:06:32	女性	158	46	比例尺度	名義尺度	間隔尺度	名義尺度
9	2018/10/17 9:06:33	男性	167	53	順序尺度	名義尺度	間隔尺度	比例尺度
10	2018/10/17 9:06:47	女性	160	50	順序尺度	名義尺度	間隔尺度	比例尺度
11	2018/10/17 9:06:48	女性	159	62	比例尺度	名義尺度	間隔尺度	名義尺度
12	2018/10/17 9:06:51	男性	164	50	順序尺度	名義尺度	間隔尺度	名義尺度
13	2018/10/17 9:06:52	男性	172	53	間隔尺度	間隔尺度	間隔尺度	間隔尺度
14	2018/10/17 9:06:56	女性	163.9	55	間隔尺度	名義尺度	間隔尺度	名義尺度
15	2018/10/17 9:06:59	男性	168	55	比例尺度	間隔尺度	名義尺度	間隔尺度
16	2018/10/17 9:06:59	男性	168	65	順序尺度	名義尺度	比例尺度	名義尺度
17	2018/10/17 9:07:03	女性	160.5	54	比例尺度	名義尺度	比例尺度	名義尺度
18	2018/10/17 9:07:03	男性	170	68	間隔尺度	名義尺度	間隔尺度	名義尺度
19	2018/10/17 9:07:05	女性	158	53	比例尺度	名義尺度	間隔尺度	順序尺度
20	2018/10/17 9:07:05	女性	160	43	間隔尺度	名義尺度	間隔尺度	名義尺度
21	2018/10/17 9:07:05	女性	157	67	順序尺度	名義尺度	間隔尺度	比例尺度
22	2018/10/17 9:07:09	女性	155	50	間隔尺度	順序尺度	間隔尺度	名義尺度
23	2018/10/17 9:07:10	男性	175	56	間隔尺度	名義尺度	比例尺度	名義尺度
24	2018/10/17 9:07:15	男性	199	86	比例尺度	名義尺度	間隔尺度	順序尺度
25	2018/10/17 9:07:16	女性	158	52	間隔尺度	名義尺度	比例尺度	順序尺度
26	2018/10/17 9:07:19	女性	153	48	間隔尺度	名義尺度	順序尺度	名義尺度

<b>授業科目：</b>	サプライチェーン戦略論		
<b>科目区分：</b>	経営学科・経営情報学科専門科目	<b>受講者数：</b>	4年生 2名（経営学科） 3年生 34名（経営情報学科） 計 36名
<b>担当者：</b>	広谷 大助（経営情報学部経営情報学科）		
<b>アクティブ・ラーニングのタイプ：</b>	行動型 ・ <b>参加型</b> ・ 複合型（※行動型・参加型ALを組み合わせて実施）		
<b>キーワード（具体的なAL手法等）：</b> グループワーク・ディスカッション・プレゼンテーション			

## 1. 授業の概要と目標

供給者から顧客までの一連のつながりを1つの鎖とみなし全体最適化を図るサプライチェーンに対してどのような問題が存在し、どのような戦略が取り込まれ最適化を図っているかを理解することを目的とする。受講者は数名のグループを組み、実際にビールゲーム及びロジスティクスゲームを行い体験することによってもサプライチェーン最適化の難しさを理解することも目的としている。

本講義は経営学科・経営情報学科共に専門科目となるが選択科目である。

## 2. アクティブ・ラーニング導入の具体的な流れ

○科目名 サプライチェーン戦略論

段階	指導過程・学修活動	指導上の留意点（工夫）	評価方法
導入 第1回 ～第5回	サプライチェーンに対する基礎概念の習得 ● サプライチェーンとは？ ● サプライチェーンのモデル ● サプライチェーンの難しさ ● サプライチェーンに出てくる用語 等	その回の内容について宿題にせず小テストを行うことによってすぐに確認させる	小テスト
展開 第6回 ～第14回	ビールゲーム（第6回～第8回） 第6回：練習 第7回～第8回：本番 *グループで行う 最新のトピックス(1) 第9回 アパレル産業における戦略 ロジスティクスゲーム（第10回～第13回） 第10回：練習 第11回～第13回：本番 *グループで行う 最新のトピックス(2) 第14回 サプライチェーンリスク管理	グループ分けについては経営学科・経営情報学科関係なくくじで決める 人数についてビールゲームは1グループ4名・ロジスティクスゲームは1グループ3名が適性 モチベーションを高めさせるために良い成績を取めたグループにボーナス点（評価点）を付与  最新のトピックスについては小テストを行うことによってすぐに確認させる。また、ゲームを続け	ゲームについてはグループレポート ビールゲームは記入用紙のみ配布。考察は各自記入 ロジスティクスゲームはワークシートを配布。考察はワークシートに記入  最新のトピックスについては小テスト

		て行うのではなくレポート作成の時間のこともあり、ゲームの合間に入れている	
まとめ 第 15 回	小テストの返却とまとめ	中間試験に対するポイントを強調する ゲームについては結果発表及びゲームの意図について説明する	なし

### **3. 成果・効果**

成果としては積極的に受講する学生が講義のみと比べて増えたということである。講義だけでなく実際に体験し、競争させることにより学生のモチベーションを高められることができる。それが授業評価にも表れ、ある年の学生の授業評価平均が 3.5 と高い評価を得た。また、ピアレビューでも一部高い評価を得た

### **4. 課題**

課題としてはグループに積極的に取り組まない学生への対応である。2. で適正人数については記載したが、受講者数は毎年変化するため全グループ適正人数にすることは不可能である。そのため、ほとんど関与しない学生が少なからず出てくる。学生へ呼びかけてはいるが限界があり更なる工夫が必要である

### **5. 資料**

ロジスティクスゲーム

久保著：サプライチェーン最適化の新潮流，朝倉書店，2011 年

ビールゲーム

システムダイナミクス学会日本支部 <<http://www.j-s-d.jp/Beer/>> (2019 年 1 月 25 日閲覧)

授業科目：	植物工学		
科目区分：	生命科学科専門教育科目	受講者数：	3年生 7名 (2018年度)
担当者：	荻田 信二郎 (生命環境学部生命科学科/応用生命科学コース)		
アクティブ・ラーニングのタイプ：	行動型・参加型・複合型 (※行動型・参加型ALを組み合わせて実施)		
キーワード (具体的なAL手法等)：	課題調査、グループワーク、プレゼンテーション、ディスカッション、クリッカーシステム		

## 1. 授業の概要と目標

植物バイオテクノロジー領域で欠かすことのできない植物細胞の諸特性について、まず教科書等の基本知識習得のためのポイントを対面授業形式にて概説する。次に講義の中で植物細胞に独特な形態形成や代謝の仕組みならびに遺伝子発現の詳細を解説し、植物細胞工学的な研究事例 (論文や研究所 HP の情報などを活用) を基にした課題の調査やディスカッションを個人、グループ毎、または全体で行い、問題解決の意識を定着させる。

課題のディスカッションにおける疑問点や改善点に関する毎回のコメント票を作成・提出することにより、積極的な知識の習得を行うことが義務付けられる。

学生は次の2項目の習得を到達目標とする。

- ① 【知識・技術】生命の基本単位である植物細胞の構造や機能詳細が理解できる。
- ② 【主体性・協働性】植物細胞の機能制御および利用について自ら調べ、考えることができる (プレゼンを含む)。

## 2. アクティブ・ラーニング導入の具体的な流れ

○科目名 「植物工学」 \*15回の全体構成がAL導入・活用のポイントであると考えます。

段階	指導過程・学修活動	指導上の留意点 (工夫)	評価方法
導入	<p>第1回：講義スタイルの説明と植物工学のチェックテスト 学修に関する指示はポータル上で出すこと (自ら確認・対応すること)、AL内容について、予め説明すること (15分) と、植物工学の概要 (30分) チェックテストを必ず実施し (45分)、次回解説していくことを指示する。</p> <p>第2回：チェックテスト解説および講義 チェックテストの解説を行い、取得すべき達成目標を意識させるよう努める (45分)。また、植物工学研究の基礎/応用研究事例を示し、修得した知識や考え方がどのように役立つのかを示す。また、今後の課題調査の方向性を示す (20分+15分程度)</p> <p>第3回：対面授業 植物工学を理解するために必要な内容を教授すると共に、前回に引き続き植物工学研究の基礎/応用研究事例を示す。</p>	<p>チェックテストは用語説明 (答えは1つ) と、模擬二次代謝経路の制御法を考える (答えは無数) 構成とする。 学修に役立てるように解答例をポータルにUPしておく。</p> <p>模擬二次代謝経路の制御法は、学生個別に考えを発表、それに解説を加えながらクラス全体で知識を共有している。</p> <p>講義資料、参考資料はPDF化の上、ポータル上にUPしておく。 (農林水産技術会議事務局 資料を活用している。その内容は、模擬二次代謝経路で学修した制御を、より最新かつ具体的な手法で制御するものであり、初回から連動した内容で構成している)</p> <p>3回目も事前に新たな資料をUPしている。</p>	<p>チェックテストは意識付けのために行うものであって、評点には加えないこと、事前に説明している。</p> <p>各回のコメント票 (30%)、ディスカッションへの参加 (30%)、期末試験 (40%) の積極的学修状況および達成度により総得点 100点満点で総合的に評価する旨、説明している。</p> <p>7名の講義では、それぞれ活発に発議、応答できている (評価)。</p>

展開	<p>第 4 回－第 6 回 自ら設定した課題の概要説明と質疑応答を含むディスカッションを実施(1回目各回 1 人 15 分程度)</p> <p>第 7 回－第 9 回 講義内で設定した共通課題本年度は「コウヨウザンの育種」について対面講義で解説した後、各自課題説明のスライド等作成を行い、順次発表を行う。発表に対して全員で質疑応答を含むディスカッションを行ってプレゼンテーションスキルの共有を図る。</p> <p>第 10 回－第 12 回 自ら設定した課題の概要説明と質疑応答を含むディスカッションを実施(2回目各回 1 人 15 分程度)</p>	<p>現時点での植物工学的な視野と考え方を確認する（現状把握）。</p> <p>*今後の取組みについて口頭とポータル配信（参考資料 1）にて指示する。</p> <p>共通課題に取り組むことによってまとめるべきポイントや各自の工夫などを共有する。</p> <p>*調査課題の説明などを口頭とポータル配信（参考資料 2）にて指示する。</p> <p>共通課題で習得したスキルを活用しながら自ら設定した課題に取り組む（学修内容の発展）。</p> <p>*今後のスケジュールや学修内容を口頭とポータル配信（参考資料 3）にて指示する。</p>	<p>各回の発表スライド等をポータルサイトにて提出をさせて、当日の発表と併せて評価している。</p>
まとめ	<p>第 13 回－第 15 回 自ら設定した課題の概要説明と質疑応答を含むディスカッションを実施する(3回目各回 1 人 15 分程度)。</p> <p>作成した問題を集め、全員で解答する。</p>	<p>その際、課題と問題の関連性を説明するので、次回の問題解答のための知識の共有が可能となる（学修内容の深化）。</p> <p>問題解答の際、クリッカーシステムを活用するよう努めている。</p>	<p>各回の発表スライド等をポータルサイトにて提出をさせて、当日の発表と併せて評価している。</p>

### 3. 成果・効果

少人数での各課題への対応と、発表、質疑応答を含むディスカッションを行っており、受け答えの中、授業アンケート等からも、考え方やプレゼンテーション力が身につけている様子が伺える。また、自ら課題を設定して調査して、繰り返し内容の発表と修正を行うので、授業外学修時間の向上が見込める。

### 4. 課題

指示もれ等を防ぐため、また課題提出を効率よく進めるためのポータル利用であるが、配信の遅れや学生の対応不備等も依然として起こりえる。今後も工夫が必要である。また、評価基準詳細の整備を急ぎたい。

### 5. 資料

- 参考資料 1：第 4 回ポータル配信 植物工学 問題作成のための検討シート  
 参考資料 2：第 7 回ポータル配信 植物工学 調査課題の説明および問題作成に際して  
 参考資料 3：第 10 回ポータル配信 植物工学 今後のスケジュールと注意点

### 参考資料 1：第 4 回ポータル配信 植物工学 問題作成のための検討シート

植物を工学的に活用する⇒「工学」であるから「Technology」より「Engineering」の意識で調べましょう。今回は個別対応です。

#### 【基本手順】

事前学修と理解：植物工学の研究手法、研究開発プロジェクトなど 資料等を参考に把握しておく。それぞれの具体的事例には 目的やねらいがあります。

- ①植物工学的な研究の具体的な活用事例や社会のニーズを探し出して、ネタにしてください。

植物起源の原材料・商品、植物（代謝）機能と環境等を、新聞・科学雑誌等のトピックス掲載、研究所HP 広報、関連省庁HP から抜粋する。

\*研究・開発の背景としてまとめていただきます。

- ②基幹となっている「植物種」、「形態形成」、「制御の仕組み」を箇条書きにて抜き出してください。その後、内容を調査していきます。

- ・植物種は、科や属、種に至るまで調べると、その技術の応用範囲等も分かる。

- ・形態形成は、葉、根、花など（場合によっては代謝能力）が、選んだトピックスの中で対象になっているはずである。

- ・制御の仕組みは問題作成の中心となるので、教科書、図書館内の関連資料および論文検索等によってしっかりと調べる。

- ③問題はシンプルな四択（正しいもの：間違っているもの を選ぶ形式）

\*1人につき3問は作成しますので、よく吟味すること。

### 参考資料 2：第 7 回ポータル配信 植物工学 調査課題の説明および問題作成に際して

1. これまでとりまとめた検討シートの内容、調査した資料をレポート様式で取りまとめてください。参考にした HP や資料から図表を引用する等、工夫を凝らしてください。ページ数に制限は設けておりませんが、この内容を別途スライド2枚程度にまとめて 口頭説明していただきます。
2. レポート調査内容を説明するためのスライド（原則2枚：①植物工学的な研究の具体的な活用事例や社会のニーズ、②基幹となっている「植物種」、「形態形成」、「制御の仕組み」をそれぞれ説明）を作成する。
3. 問題スライド（3問）の作成：これまで説明した事例、フォーマットを活用して作成します。

\*別途 問題作成の共通フォーマットの配信があります。

### 参考資料 3：第 10 回ポータル配信 植物工学 今後のスケジュールと注意点

10 回目：12 月 3 日（本日）\*コウヨウザンについて \*その他 先週の修正や、質疑

11 回目：12 月 10 日 \*これまでの調査内容を説明するためのスライド作成と発表

12 回目：12 月 17 日\*これまでの調査内容を説明するためのスライド作成と発表

13 回目：1 月 7 日\*レポート内容を説明するためのスライド作成と発表

14 回目：1 月 21 日\*スライド 作成した問題を全員分あつめて解答していきます。

15 回目：1 月 28 日\*総括と振り返り（期末テスト対応）\*レポート提出はあります。

授業科目：	植物組織培養学		
科目区分：	生命科学科専門教育科目	受講者数：	3年生 96名 (2018年度)
担当者：	荻田 信二郎 (生命環境学部生命科学科/応用生命科学コース必修、食品資源科学コース選択)		
アクティブ・ラーニングのタイプ：	行動型・参加型・複合型 (※行動型・参加型ALを組み合わせて実施)		
キーワード (具体的なAL手法等)：	コメント票、課題調査、グループワーク、プレゼンテーション、ディスカッション、ラーニングコモンズ活用		

## 1. 授業の概要と目標

植物の生長や分化、環境との関連性、資源利用などに興味を持つ学生を対象にして、植物の形態変化および代謝に関する基本知識を習得するとともに、植物細胞・組織培養技術の種類と利用形態を理解することを目指す。主として対面授業、講義形式で行う。一部は課題を設定して学生からの報告およびディスカッション形式を実施する。各回のコメント票でのやりとりを重要視している。また課題を設定してグループワーク等によって調査や討議を実施する。グループによるプレゼンテーションを実施する。

学生は次の3項目の習得を到達目標とする。

- ① 【知識・技能】植物の形態形成と代謝反応の基礎が理解できる。
- ② 【思考・判断・表現】植物細胞・組織培養技術の確立手順について自ら考えることができる。
- ③ 【主体性・協働性】植物資源の機能制御および利用について自ら調べ、考えることができる (プレゼンを含む)。

## 2. アクティブ・ラーニング導入の具体的な流れ

○科目名 「植物組織培養学」 \*7回目ラーニングコモンズ活用直前のコマ

段階	指導過程・学修活動	指導上の留意点 (工夫)	評価方法
導入	<p>【経緯】第1回:講義スタイルの説明と植物組織培養学の確認テストを実施している。 自ら設定する課題は、テストの解答に基づいている。</p> <p>第6回までに、植物組織培養を行う際に必要な知識の教授および、グループでの課題設定などを終えており、これまでの経緯と復習を講義冒頭に示す (10分+20分程度)</p>	<p>確認テスト中で「身の回りで資源として活用されている植物とその利用形態で、興味深いものを一つ挙げて、その理由も簡潔に示せ」という問を設けている。その解答を集計して、植物種とその用途別にグループ分けを実施している。これにより、興味の近い学生同士がグループワークに取り組むことができる (この際、所属研究室や履修コースは無関係にグループとなる)</p> <p>講義資料、参考資料および7回目に活用する課題の取りまとめについては、事前にポータル上にUPしておく。課題については、初回から連動した内容で構成している)</p>	<p>各回のコメント票 (50%)、ディスカッションへの参加 (20%)、期末試験 (30%) の積極的学修状況および達成度により総得点 100点満点で総合的に評価する旨、既に説明している。</p> <p>*人数が多いので第1回目-3回目に、良いコメントと、改善を要するコメントの事例を用いて説明を繰り返し、能動的に取り組むように促している。</p>

展開	<p>第7回 課題の発表と解説 講義内で設定した課題について各グループ内で順次説明、ディスカッションを行う。発表に対して教員が適宜で解説することで（40分程度）、課題の共有を図る。</p>	<p>以下のように事前にポータルで掲示している。</p> <p>1：自分たちがレポートの中で（確認テストの中で）選んだ植物について、具体的事例の活用まとめフォーマットに準じて簡潔にまとめ、印刷物あるいは電子ファイルとして持参してください。</p> <p>次回のグループワークに活用します。</p> <p>*どんな組織系が その植物を資源として活用するときには大事か？</p> <p>*その成長や代謝物の蓄積に関係する植物成長調節物質は？</p> <p>2：前回配信のスライドに関して、植物の組織形態と、植物ホルモンの作られる場所や働く場所の関係を整理する。</p> <p>発展課題：ストリゴラクトン等新規のホルモン(様)物質について学修する。)</p>	
まとめ	<p>本日のグループワークのとりまとめを期日までに提出すること、指示。</p> <p>次回からの図書館ラーニングコモンズでは、</p> <p>1：グループ毎の教員とのディスカッション（進捗とさらなる調査項目のやりとり）</p> <p>2：図書館の関連文献等を積極的に活用しながらの調査となること、指示。</p> <p>当日の出欠、コメント票提出、図書館活用上の注意など指示（合計20分程度）。</p>	<p>その際、同内容を掲示としてポータル配信する。</p> <p>以後、ラーニングコモンズでのグループワークや進捗、新しい指示などは、グループリーダーに伝えると共に、ポータル配信を行う。</p>	<p>評価は後日行うグループ毎の発表会で行う。</p>

### 3. 成果・効果

コメント票（A4半分が1回分、両面1枚で4回分）に関しては各回の学修成果等を把握するために毎回赤ペン添削を実施し、PDFとしてアーカイブ化すると共に（採点に活用）、原本は本人に返却している。このやりとりを通じて授業の目標を積極的に達成しようとする力（能動的な学修態度）や、発問する力が身につけている様子が個々のレベルでモニターできる実感がある。また、グループで課題を設定して調査して、繰り返し内容の発表と修正を行うので、授業外学修時間の向上が見込める。

### 4. 課題

大人数科目であり指示もれ等を防ぐため、また課題提出を効率よく進めるためのポータル利用であるが、配信の遅れや学生の対応不備等（24件の発信中各回で96人中10-40人程度が掲示確認）も依然として起こりえる。講義内での注意喚起をしても、ポータル上の掲示未確認者が半数ほど存在することになり、実際とかけ離れているかどうか確かめる術が必要である。例えば自動リマインダーなど、工夫ができないか？また、グループワークへの取組みは積極的か否かが大きく分かれるところもある。研究室配属後の科目であり、必修と選択の差もあるが、知識・技能の習得以上に自ら「考える」力を養えるように講義内での課題設定で、もう少し共通課題の比率を上げるなど、さらに工夫する必要もある。

### 5. 資料

授業科目：	環境社会科学 I		
科目区分：	環境科学科専門科目	受講者数：	53 名
担当者：	小林謙介（生命環境学部 環境科学科）		
アクティブ・ラーニングのタイプ：	参加型		
キーワード（具体的な A L 手法等）：			

## 1. 授業の概要と目標

本授業の目標は、「環境問題の回避・解決のためには、様々なステークホルダー（利害関係者）が、それぞれの立場で対策に取り組む必要がある。本講義では、国・自治体、事業者、個人・市民など、社会におけるそれぞれの立場から、環境問題にどのような形で取り組み、循環型社会の構築に向けた活動が行われているのかを理解する。」であり、対面形式で実施している。

特に、実社会における環境関連の事象・活動等（自治体・企業・市民等の活動、法律、倫理、経済など）を知り、持続可能な社会に向けて自らが何をすべきかを自ら考える力を養うことを目指す。基礎知識だけではなく、自らの意見を持つことも重要と考え、できる限り、授業時間内にディスカッションを行う時間をとっている。

## 2. アクティブ・ラーニング導入の具体的な流れ

○科目名 環境社会科学 I

段階	指導過程・学修活動	指導上の留意点（工夫）	評価方法
導入 10 分	<ul style="list-style-type: none"> <li>予習課題の提出</li> <li>前回授業の振り返り（5 分程度）</li> <li>本日の授業のルーブリック（実施内容と到達目標）の説明、公判で実施するディスカッションのテーマの提示（5 分程度）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>各回の最後に質問・コメント等をシートに書かせており、それらに対する回答を全員の前で行う。</li> </ul>	
展開 70 分	<ul style="list-style-type: none"> <li>講義（内容の説明） 教員が作成した資料をもとに、本日に関わる内容について説明（45 分程度）</li> <li>ディスカッション 導入で出題したテーマについて、説明した内容を踏まえて、自分の意見をコメントシートに書かせる（5 分程度）。 次に数人程度のグループを作り、自分の意見を説明するとともに他人の意見を聞き、ディスカッショ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ディスカッションについては、事前にテーマを出題したうえで講義を行うことで、学生の集中力を高めることを狙っている。ディスカッションは、自分の意見を持つこと、自分が考えた意見</li> </ul>	

	ン。それらの内容について、コメントシートにメモする（10分程度）。 最後に、ディスカッションを踏まえた考えたことをコメントシートにまとめる（10分程度）。	とは別の意見を持つ人がいること、それを踏まえて、学生の考えの幅を広げさせることを目的としており、対話だけではなく、スマホで情報を検索することなども許可している。	
ま と め 10分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本日の活動の振り返り（授業終了時まで提出） <ul style="list-style-type: none"> <li>・確認テストの実施</li> <li>・質問等のコメント記入</li> </ul> </li> <li>・次回の予習課題の出題（次回授業開始前までに提出）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本日の学修全体の振り返りを行う（主要なキーワード等の理解状況確認等）。また、不明な点はその場で教員に確認するか、コメントシートに記載させ次回回答する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・提出されたコメントシート・確認テストの内容をもとに評価</li> </ul>

### **3. 成果・効果**

学生へのアンケート調査結果を見ている、任意の環境問題に対する自分の意見を整理したり、学生同士意見を交換したりすることはあまりなかったため、大変良かった（他の授業でも実施してほしい）との声が多く聞かれた。こうした取り組みにより、学生自らが、いっそう主体的に考えを持つようになることが期待できる。

### **4. 課題**

大人数であるため、グループ編成は学生に任せざるを得ない。自由にグループを作らせると、どうしても自らその輪に加われない学生がいる。そのためディスカッションの質については学生によって大きくばらつく点が課題である。

### **5. 資料**

講義資料（印刷の上、パワーポイントで投影しながら説明）、回覧資料（必要に応じて）、予習シート、確認テスト・コメントシート・ディスカッションシートなど

授業科目：	教育社会学		
科目区分：	教職科目	受講者数：	20
担当者：	藤井宣彰（生命環境学部環境科学科）		
アクティブ・ラーニングのタイプ：	行動型 ・ 参加型 ・ 複合型（※行動型・参加型ALを組み合わせて実施）		
キーワード（具体的なAL手法等）：	グループワーク、ディスカッション		

## 1. 授業の概要と目標

この科目は、教育職員免許法等に基づき開設されている本学教職課程の科目である。教育の基礎理論に関する科目として開講されており、とりわけ教育に関する社会的・制度的・経営的事項を中心に学修する。

学校や教育行政制度と改革動向について基本的な知識を身につけ、教員として勤務し、地域と連携しながら生徒を指導する上で必要な教育法規や教育制度、学校経営に関する事項を学修する。

本時は、教員の服務について理解し、事例から自身が留意すべきことを考察する。

## 2. アクティブ・ラーニング導入の具体的な流れ

○科目名「教育社会学」 第14回「教員の服務」

段階	指導過程・学修活動	指導上の留意点（工夫）	評価方法
導入	発問「教員の不祥事に関するニュースを見たことがありますか。」(5分) 本時は教員として勤務する上で求められる義務について学ぶ。(5分) 板書「教員の服務について理解する」	表情等で反応を見せた学生を指名し、発言させる。	
展開	身分上の義務と職務上の義務に関する事項についての解説をする。(30分)  事例研究（4名程度によるグループワーク） 個人情報漏えいについて、実際にあった事例について紹介する。(15分)  ディスカッション（15分） 論点 ・学校が保有する個人情報にはどのようなものがあるか。 ・事例の教員の行動における問題点は何か。	学生にイメージしやすい例えを交える。 (例：家族が出しているお店を手伝うことは、副業と誤解される可能性がある。)  学生にもなじみがあるものによる事例を用いる。  あまり考えが出ない場合は補足を加える。 個人で注意するだけでなく、組織的な問題や対策	ワークシートへの記述内容。

	<p>・防止のためにどのような対策を取る必要があるか。</p> <p>共有（10分） グループごとに出た意見について発表を求め、クラスで共有する。</p>	<p>にも目を向けさせる。</p> <p>否定的なコメントをしないように意見を受ける。</p>	
まとめ	<p>本時の振り返り（10分） 教員の服務には何があるか。 違反した場合の処分。 個人としての心掛けと組織的対策。</p>		

### **3. 成果・効果**

授業アンケートに、USBメモリーの紛失など事例が分かりやすいという自由記述があり、具体的なイメージを持つことができている様子が見える。

グループワークでは積極的な学生とそうでない学生がいるため、発表させる学生は教員がランダムに指名するようにして、何もしないことができにくくしてみた。

学生の中で、一通り意見が出たと判断したグループは議論が終わる場合があるため、「個人が気を付けていてもミスは起こるので、学校としての防止策をどうすればよいか。」といった声かけを行った。

### **4. 課題**

授業内容が大切なものであるとの認識はあるようだが、さほど強い教職希望のない者など、自身には関係のないことと捉える者もいる。例え教員にならないにしてもこのような義務が課されることは意識させたい。

授業外学修時間を増やすため、教員から事例を提示するだけでなく、宿題として事例を収集させることも考えられる。

### **5. 資料**

教育委員会による啓発資料等

授業科目：	日常生活援助方法論Ⅱ		
科目区分：	看護学科専門領域特有の科目	受講者数：	1年生 64名（2018年度）
担当者：	青井聡美（保健福祉学部看護学科）		
アクティブ・ラーニングのタイプ：	行動型 ・ <b>参加型</b> ・ 複合型（※行動型・参加型ALを組み合わせて実施）		
キーワード（具体的なAL手法等）：	グループワーク、ディスカッション、プレゼンテーション		

## 1. 授業の概要と目標

本科目では、看護の対象を理解し、適切な看護ケアを実践するための基礎的な看護の方法を学ぶ。ここでは、健康な人間にとっての日常生活行動の意味を看護の視点から理解し、日常生活行動に関する援助技術が科学的根拠を理解した上で実践できるように学修する。

- ①日常生活を助ける看護技術に関する安全・安楽・自立の原則を述べることができる。
- ②日常生活を支援する看護技術を、対象に提供するための具体的方法を考えることができる。
- ③日常生活を支援する看護技術の基本的な手技を説明、かつ実施できる。
- ④日常生活援助を必要とする対象への援助を通して、対象に必要な配慮を考え、看護職としての基本的姿勢を身に付けることができる。演習では、学生間において看護師役と患者役を体験しながら、援助を受ける患者の気持ちを理解するとともに、援助技術の基礎的な行動が形成されることを目的に学修する。

## 2. アクティブ・ラーニング導入の具体的な流れ

○科目名 日常生活援助方法論Ⅱ 第13回 ポジショニング 口腔ケア

段階	指導過程・学修活動	指導上の留意点（工夫）	評価方法
導入	講義：ポジショニング（20分） 演習目的・方法の説明（3分） ファーラー位でのポジショニング及びクッションの使用方法についての説明（5分） 義歯の装着（3分）	事前課題 ①体位の定義と特徴 ②同一体位を長時間とることでのどの部位が苦痛を感じるのか図示する ③口腔ケアの手順書を完成させる	
演習	1ベッド学生配置人数：3～4人 演習方法：ABグループに分かれ演習する。 Aグループ：【前半】ポジショニング（仰臥位・側臥位） 【後半】口腔ケア/義歯装着 Bグループ：【前半】口腔ケア/義歯装着 【後半】ポジショニング（仰臥位・側臥位）	学生の演習状況を確認し、クッションを挿入する時の観察点や根拠を説明する。 口腔ケアにおいても、同様に科学的根拠に基づいたケアを実践できるように助言する。	
	Aグループ	Bグループ	

展開	前半	<p>ポジショニング演習          &lt;仰臥位&gt; (35分)          ①事前課題②についてグループで話し合う。          ②苦痛を感じた部分を考慮しながら体圧がどこにかかっているかマルチグローブを使用し観察を行う。クッションを使用し、ポジショニングを行い、安楽な体位に整える。          ③クッションをどこにどのように使用したか、ポジショニング後の変化と安楽な体位をとる上で工夫した点についてまとめる。          ④③でまとめた内容をグループ内で意見交換する。</p> <p>&lt;側臥位&gt; (35分)          上記①～④を実施する。</p>	<p>口腔ケア演習          ・看護師役・患者役・観察者役となり実施する。          ・患者役の学生は、臥床する前に歯を染色剤で染めておく          ・グループ全員が終了した後、義歯モデルを使用し、総義歯の外し方とはめ方を行う。</p>		
	後半	口腔ケア演習	ポジショニング演習		
まとめ		<p>本時の演習の振り返り          シャトルカード          自己学修ノート(演習での学びと課題)</p>		<p>本時の学修全体を振り返らせる。本時の学びを学修ノートの「演習での学びと課題」に記載させる。</p>	<p>自己学修ノート提出時に評価</p>

### 3. 成果・効果

授業後の学びと感想によると、「どのような姿勢が安楽かは個人差がある。バランスを見ながら見ていくことが必要である」「実際にベッドに寝てみて、圧がかかる部位が良く分かったし、クッションを入れることで圧が軽くなっていくのを体験できた」「3人で意見を出し合うことでたくさんのアイデアがでてきた」などの記述があった。患者個々に合わせた援助が必要であり、クッションを入れるだけでなく、その後の観察が大切であるということに気づき、学びが深まっていた様子がうかがえた。

授業参観した FDer のコメントからも、グループで話し合いながらよりよい方法を考えている。技術のポイントをメモしている。教員の発問やコメントに対して学生同士で共有し深めているという点がみられた。

### 4. 課題

一方で、学生の中には、ポジショニングの事前課題が不十分な学生がいた。そのため、演習前のディスカッションが十分できていないグループがみられた。次年度へ向け、事前課題についての説明と自己学修ノートの記載方法についてのオリエンテーションを強化しさらに工夫を重ねたい。

### 5. 資料

<b>授業科目：</b>	解剖学実習における人体解剖見学実習		
<b>科目区分：</b>	保健福祉学部専門科目	<b>受講者数：</b>	64人
<b>担当者：</b>	津森登志子 <sup>1</sup> ，加藤洋司 <sup>1</sup> ，高宮尚美 <sup>2</sup> ，佐藤勇太 <sup>2</sup> ，金指美帆 <sup>2</sup> ，岡村和典 <sup>2</sup> (保健福祉学部・看護学科 <sup>1</sup> ，理学療法学科 <sup>2</sup> )		
<b>アクティブ・ラーニングのタイプ：</b>	行動型		
<b>キーワード（具体的なAL手法等）：</b>	学習支援アドバイザーの活用		

## 1. 授業の概要と目標

理学療法学科・作業療法学科の必修科目で2年前期開講、全90時間の実習科目。骨学実習・組織学実習・肉眼解剖実習から構成、人体の正常構造をマクロ・ミクロの観点から多角的に学ぶ。実習最後の2回は広島大学医学部解剖センターに出向き、ご遺体の様々な剖出標本について学ぶ見学実習を行う。この見学実習を通して、単に解剖学の知識の定着だけでなく、人体の神秘と尊厳を学び、医療者になる自覚を高める。

見学実習では教員による説明は行わず、学生が各自事前に立てた学習目標に基づき作成した学習資料に基づき、自分の力でご遺体に向き合っ て学ぶというスタイルを踏襲している。この場に昨年度までに見学実習に参加した上級生が学習支援アドバイザーとして加わり（3年・7人、4年8人）、上級学年としての経験を活かしながら、2年生の学びをアシストする。

## 2. アクティブ・ラーニング導入の具体的な流れ

○科目名 解剖学実習における人体解剖見学実習

段階	指導過程・学修活動	指導上の留意点（工夫）	評価方法
導入	見学実習前の事前説明会開催で2年生と参加予定の学習支援アドバイザーが面談できる機会を設けた。アドバイザーは、事前資料の作成の仕方などについて2年生とコミュニケーションをとった。	アドバイザーには、自分が実際に参加した見学実習での体験をもとに学習資料の作成方法や当日の学び方についてアドバイスするように指示した	
展開	<p>広大解剖センターでの見学(2018年8月23,24日実施)では、理学療法・作業療法学科の混成班(各4人)を8班作成し、各班にアドバイザーを2人ずつ配置した。</p> <p>2日間にわたる見学実習の間、2年生とアドバイザーは班単位で行動した。</p>	<p>アドバイザーには、解剖学の知識自体を与える必要はないこと、標本の見方や観察のポイントなど、主として学修の仕方についてアドバイスするように伝えた。</p> <p>教員は基本的に説明(知識の伝授)を行わず、アドバイザーの活動の状況把握と2年生とのコミュニケーションがうまく取れているかどうかを配慮した。</p>	

まとめ	見学実習終了後に、アドバイザー、2年生双方にアンケートを行い、学修支援アドバイザー配置の意義や次年度への継続性について学生側の意見を聞いた。		
-----	--	--	--

### **3. 成果・効果**

- ・人体解剖見学実習を経験した上級生がアドバイザーとして存在することで、2年生が自らの学修到達目標を先輩という形で具現化できる。
- ・次年度は自分自信がアドバイザーとして実習に参加しようというモチベーションを上げる効果が期待される。
- ・アドバイザー自身が専門科目の学修、臨床実習の体験を踏まえて再び専門基礎科目の重要性を再認識する機会につながり、また同時にそのことを下級生に伝える貴重な機会にもなる。

### **4. 課題**

アドバイザー立候補へのモチベーションに学科間に差があるため、理学療法学科・作業療法学科双方から同等数のアドバイザーを確保することが難しいこと。結果的に、見学実習班は理学・作業療法学科の混成班にしているため、2年生とアドバイザー同士のコミュニケーションが悪い場合が発生した。

### **5. 資料**

「解剖見学実習への学修支援アドバイザーの活用」に関するアンケート結果（2018年8月24日実施）の抜粋（別紙添付）

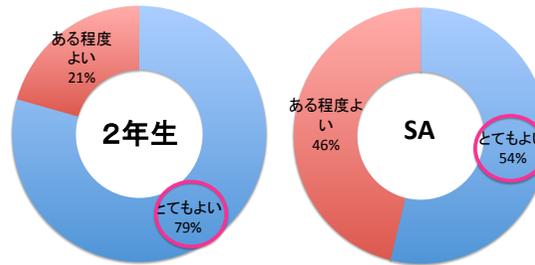
## 見学実習後に学修支援アドバイザー(SA)に関するアンケートを実施

- ◆ 見学実習への上級生SA参加の意義について
- ◆ SAの利用状況について
- ◆ SAの役割について
- ◆ 次年度以降のSA候補について
- ◆ 自由記載意見

対象:理学療法学科 (PT) 2年:31名  
 作業療法学科 (OT) 2年:32名  
 SA 3年:7名, 4年:8名

### SA配置に関するアンケート結果より

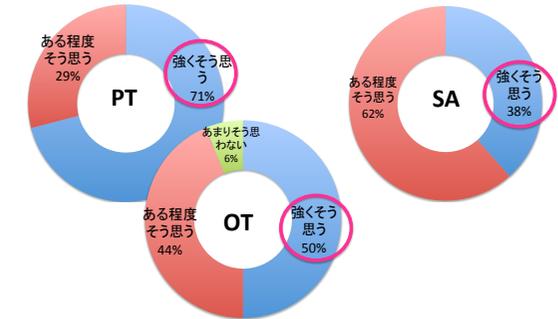
見学実習経験者の上級生がSAになることについてどう思いますか



### SA配置に関するアンケート結果より

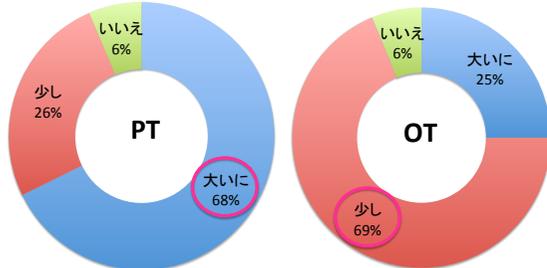
SAは積極的にアドバイスしてくれましたか

あなた自身(SA)は積極的に活動しましたか



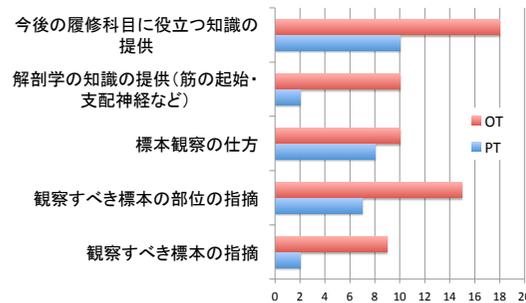
### SA配置に関するアンケート結果より

あなた自身(2年生)はSAと直接コミュニケーションを取りましたか



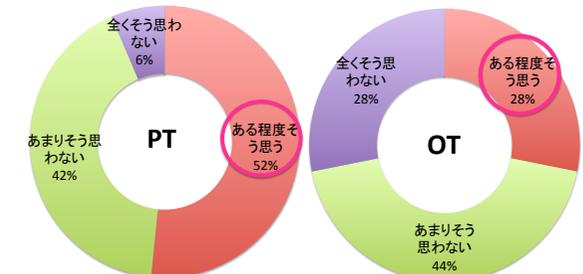
### SA配置に関するアンケート結果より

SAにして欲しかったことは何ですか(2年生対象)  
 (複数回答可)



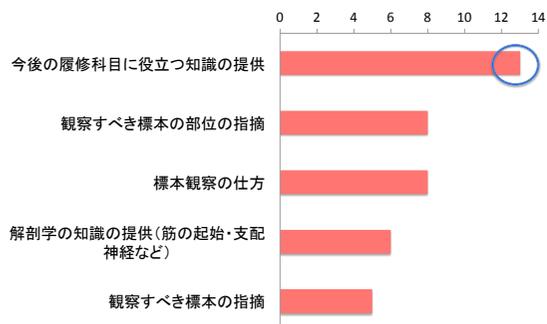
### SA配置に関するアンケート結果より

来年度あなた自身(2年生)がアドバイザーになってみたいと思いますか



### SA配置に関するアンケート結果より

SAとしてした方がよいことは何ですか(SA対象)  
 (複数回答可)



### SA配置に関するアンケート結果より

#### 2年生の自由記載から

- ・股関節や膝について**実習での体験を含めながら**教えて下さいました
- ・実際に標本を観察すると部位などわからなくなりましたが、**観察のポイントとしてどこを目安に見ればよい**かなど丁寧に教えてくれた
- ・**どう観察すればよい**のか丁寧に教えてくださり、とても勉強しやすかったです
- ・3年生ならではの**視点**でいろいろと教えてくださり、分かりやすかった
- ・自分では**観察しなかったようなポイント**が聞けてよかった
- ・3年生になったら**先輩のように**しっかり知識をつけたいです
- ・先輩たち**みたい**になれたらいいな

<b>授業科目：</b>	解剖学概論		
<b>科目区分：</b>	保健福祉学部 専門科目の基礎となる科目	<b>受講者数：</b>	160人
<b>担当者：</b>	津森登志子（保健福祉学部看護学科）		
<b>アクティブ・ラーニングのタイプ：</b>	行動型		
<b>キーワード（具体的なAL手法等）：</b>	クリッカーを使用した双方向支援授業		

## 1. 授業の概要と目標

看護学科・理学療法学科・作業療法学科・コミュニケーション障害学科の必修科目で1年前期開講。1年後期以降展開されるすべての解剖学関連科目の基礎となる位置付け。国家試験にも出題のウエイトが多い分野。医療系大学に入学後の初めて本格的に学ぶ医療専門科目の一つであるため、本科目への取り組みは単に解剖学の知識の基盤定着だけでなく、医療系学生としての学修スタイル確立の是非に関わる。

## 2. アクティブ・ラーニング導入の具体的な流れ

○科目名 解剖学概論

段階	指導過程・学修活動	指導上の留意点（工夫）	評価方法
導入	<ul style="list-style-type: none"> <li>・講義1週間前にはポータルに講義資料を掲示。学生は事前に入手して目を通し、テキストの関連項目にも目を通しておくことが要求される。</li> <li>・学生は講義室に集合するとすぐに前回の講義範囲を復習してテストに備える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・毎回の講義資料の最後に、講義のサマリーを箇条書きに整理している。学生にはまずサマリーから目を通して講義概要を把握することを勧めている。</li> </ul>	
展開	<ul style="list-style-type: none"> <li>・講義開始直後に、前回の講義範囲のうち特に重要な項目についてクリッカーを使用した復習テストを行う。1問五択形式で4問を出題。</li> <li>・1問ごとに全員の回答状況をグラフで提示した後答え合わせを行い、学生は絶対的位置（正誤確認）と相対的位置（正解者の割合確認）を認識する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・難解な問題（正答率が低すぎる問題）は避け、回答意欲を削がないように留意する。</li> <li>・問題にバリエーションをつける（正誤問題、図の名称、語句選択等）</li> </ul>	
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・テストを通して、自分の理解度や重要項目の把握度を学生自身が省察する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・正答への導き方をその都度丁寧に解説する。</li> <li>・正答率が悪かった内容については後日、別の角度から再度出題するなど、繰り返す。</li> </ul>	

### **3. 成果・効果**

- ・大人数の受講者、大講堂での講義という形式での授業スタイルでの双方向授業を可能にする。
- ・教員がリアルタイムで学生の回答状況や理解度を個人レベル、学科レベルでも把握できる。
- ・適時のフィードバックが可能になる。
- ・理解度が低い内容については繰り返して問題提起を行い、その都度習得度を確認できる。
- ・アンケート調査の結果、全学科の大部分の学生がこの形式を支持し、継続を望んでいた。
- ・クリッカーを使用した一連の復習テストの実施は、自学自習に対するモチベーションを上げ、受講準備を整えることに効果があると思われた。

### **4. 課題**

本システムはポータブルでどの教室でも利用でき、多様な講義・演習で様々な使い方ができると思われるが、他の教員になかなか波及しない。

### **5. 資料**

授業評価の自由記載の抜粋（下記）、アンケート結果の抜粋（別紙添付）

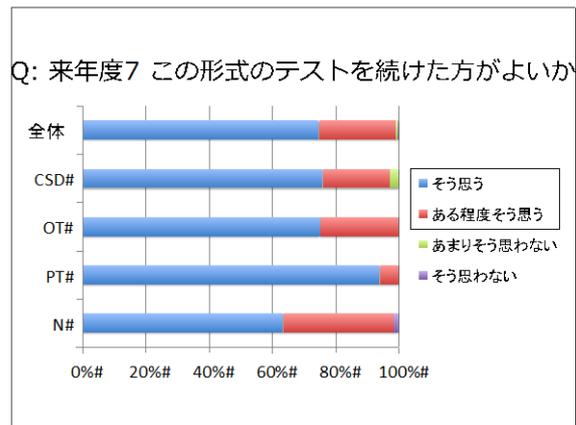
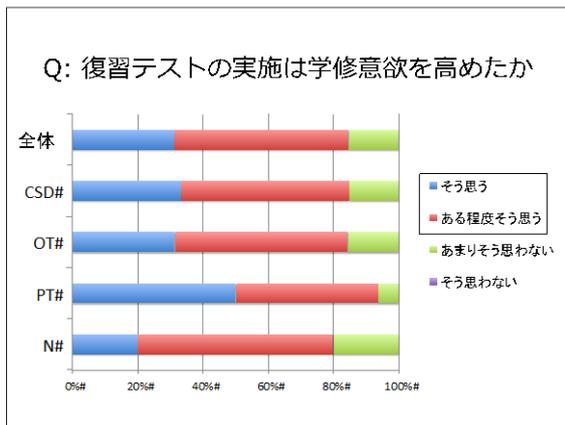
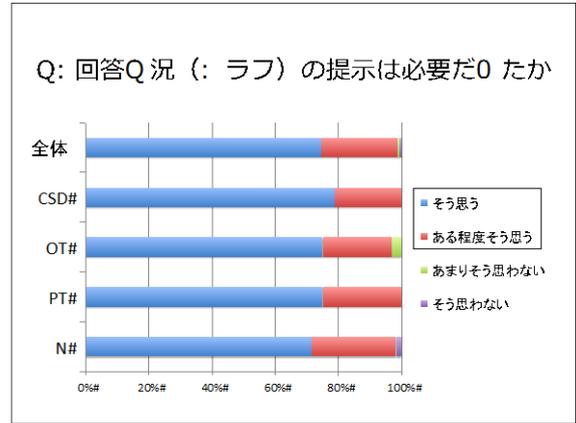
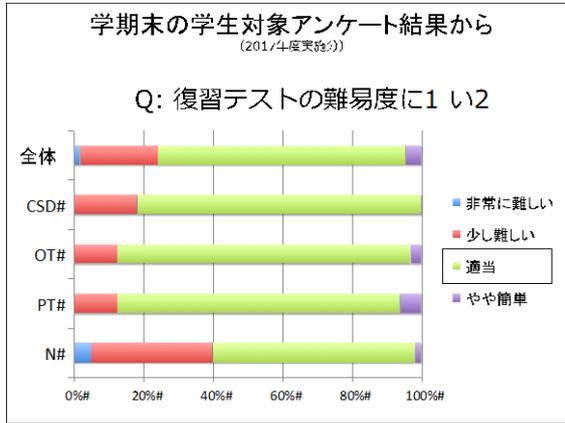
—授業評価・自由記載から抜粋— 「クリッカーによる復習テスト」の実施について

アンケート実施日：

・クリッカーを使用する小テストはゲーム感覚で楽しく学べてよかった
・小テストで自分の理解できてないところを発見することができてよかった
・復習の1つの目標となって良かった。これからも続けて欲しい
・小テストをしてその場で解答が分かるのは、知識が定着しやすいと思いました。
・みんなで競いあってできてよかった
・自分の習熟度や不足している点がよくわかって良かったです
・大変役に立ちました。あの結果を見て、勉強しようと思えたので、ぜひ続けてほしいです
・これからもこのシステムを続けてほしいと思います
・クリッカーのおかげで苦手なところがわかったから続けてほしい

ークリッカーを使用した解剖学概論の復習テストに関してー  
 (アンケート結果の抜粋)

アンケート実施日： 回答者数：



N:看護学科  
 PT:理学療法学科  
 OT:作業療法学科  
 CSD:コミュニケーション障害学科

<b>授業科目：</b>	教養ゼミナール「グローバルな視点で見るジェンダー格差を考えよう」		
<b>科目区</b>	全学共通選択科目	<b>受講者数：</b>	2+1（聴講生）
<b>担当者：</b>	保健福祉学部看護学科 日高陵好		
<b>アクティブ・ラーニングのタイプ：</b>	行動型 ・ 参加型 ・ 複合型（※行動型・参加型ALを組み合わせて実施）		
<b>キーワード（具体的なAL手法等）：</b>			
事前課題、文献調査／発表、討論、ゲスト、フィールドワーク、プレゼンテーション（パワーポイント使用）			

## 1. 授業の概要と目標

### 授業の目標

- ・ グローバルな視点を取り入れてわが国のジェンダー格差について考察できる
- ・ 文献資料、討論、フィールドワークを通して批判的に思考し自分の考えを構築できる
- ・ フィールドワークから課題を発見し考察した内容を、他者に明確に伝えることができる

### 授業の概要

ジェンダー格差について、社会の中の男女の位置づけ、役割、法的保護、ワークライフバランス、夫婦やカップル間の役割、男女の働き方、社会への参画といったトピックから考える。文献資料の講読、議論、フィールドワーク、発表を通して理解を深め考察する。

## 2. アクティブ・ラーニング導入の具体的な流れ

○科目名 教養ゼミナール「グローバルな視点で見るジェンダー格差を考えよう」

本授業は、毎回アクティブラーニング授業（参加型／行動型）となっている。そのため1回の授業についてではなく、15回の授業の全体像を下記に示した。

段階	指導過程・学修活動	指導上の留意点（工夫）	評価方法
前半	事前課題として世界のジェンダー格差に関する英文記事を読んでおいてもらう。それを最初に分担して読み、討論を行った。	英文がすべてわからなくても、記事の内容をどれだけ読めてるかに重点を置き、そこから意見交換して内容理解を深めた。	事前課題の予習度、積極性・参加度
中盤	ジェンダー格差について3つの視点を決め、3人の受講生にそれぞれ文献等から調査してもらい、A4資料により発表した。  海外のゲスト（アメリカ人青年男女2人）を招いて、ジェンダー格差について討論した。海外の状況について、海外の若者の考え方に触れた。	A4資料がわかりやすく作成されているか指導した。  積極的にコミュニケーションをとることを求めた。時折、通訳を行い、ファシリテートを行うようにした。	A4作成資料と発表方法を評価  積極性・参加度

終盤	フィールドワークとして自分の暮らす自治体の「男女共同参画」関係部署を訪問し、インタビューを行った。そこから地域にある課題を発見し、それについてまとめ・考察し、プレゼンを行った。	訪問インタビューをフォローした。また、パワーポイントの内容と発表の仕方については事前に個別指導を行った。	フィールドワークの内容、パワーポイントを含めた発表の仕方、伝え方。課題発見、考察力。
----	--	--	--

### **3. 成果・効果**

少人数であったためゼミ形式で非常に密な授業になった。受講者はいずれも積極的で、議論が活発化した。聴講生も最後まで受講生と同様に取り組んだ。最後のプレゼンも個別指導内容を参考に各人で修正し練習を積んで行ってもらった。プレゼン内容も発表も質の高いものになったと思う。ジェンダー格差について、世界から始まり、最後に身近な地域での実際を理解、考察することができて有意義であったと思う。また、キャンパス、学年の枠をはずした受講生にとって、とても刺激的であり、別の視点からの意見交換ができたと思う。

### **4. 課題**

3～4年生の選択科目であるため、受講者が少ないことが課題である。  
内容が密な授業であり、個別指導等を鑑み、6人程度のクラスになることが望ましい。

### **5. 資料**

特になし

授業科目：	精神看護学概論		
科目区分：	看護学科専門科目	受講者数：	60名
担当者：	井上誠（保健福祉学部看護学科）		
アクティブ・ラーニングのタイプ：	行動型 ・ 参加型 ・ 複合型（※行動型・参加型ALを組み合わせて実施）		
キーワード（具体的なAL手法等）：	個人ワーク グループワーク プレゼンテーション ディスカッション		

## 1. 授業の概要と目標

看護の対象となる全ての人の精神保健をライフサイクルと生活の場の視点から説明できる。現代社会における心の健康問題として急増する不適応について説明できる。人間の心を理解するための基礎的知識について身近な体験と関連付けて説明できる。授業を通じて援助対象者の体験を分かろうとする態度を身につけるとともに、学生自身のメンタルヘルスを振り返りストレスマネジメントについて考えられる。地域精神保健の現状を身近な例を挙げて説明できる。精神医療の歴史と法律の改正経過および精神看護の倫理を関連付けて説明できる。本科目は精神看護学の基礎であり、精神看護方法論につながる重要な科目として位置づけられる。

精神看護学の位置づけとその学習内容を概観する。精神保健の概念を学び、心の健康を深く考える機会をもつ。心を理解するための諸理論やモデルを学ぶ。現代社会における精神保健の現状をライフサイクルと生活の場の視点から概観し、地域精神保健活動の現状について理解を深める。臨床における患者・家族および看護師自身の精神保健について学び、総合病院などの場において彼らを支援するリエゾン精神看護についても理解を深める。さらに精神疾患をもつ人への処遇の歴史を精神保健医療の沿革や関連法規を通じて学び、人権擁護の意識や倫理観を養うための基礎とする。

## 2. アクティブ・ラーニング導入の具体的な流れ

○科目名 精神看護学概論 第10回,11回,12回リエゾン精神看護事例検討

段階	指導過程・学修活動	指導上の留意点（工夫）	評価方法
導入	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 前回までの振り返り</li> <li>・ なぜリエゾン精神看護を学修することが重要なのか理解する</li> <li>・ 個人ワークとグループワークの流れについて</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 精神看護概論講義の内容を思い出して頂く</li> <li>・ リエゾン精神看護について学修内容を理解する</li> <li>・ 流れを確認してどのように展開するのか、イメージして頂く</li> </ul>	
展開	1回目 2回目 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 基本事項の説明（10分）</li> <li>・ 質疑応答</li> <li>個人学修               <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 個人ワーク 事例を読み取る,理解する</li> </ul> </li> </ul> 2回目 3回目 <ul style="list-style-type: none"> <li>共有学修</li> </ul>	基本事項が理解できたか確認する。  個人ワークの進行状況を確認する。	

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループワーク 看護目標 情報 アセスメントなどについて個人ワークをもとにグループでまとめる。</li> <li>・事例をもとにグループワークで検討したことをロールプレイにて発表して、クラス全体で共有する。</li> </ul> <p><b>意見交換</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・質疑応答をおこない、意見交換をおこなう。</li> <li>・振り返りをおこなう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループワークの進行医状況を確認する。</li> <li>・グループワークが苦手な学生,参加していない学生がいないか確認する。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・出来ている,よい意見はしっかり褒める。</li> <li>・もう少し知っていて頂きたいポイントを押さえる。</li> </ul>	
まとめ	<p>講義の振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・事例について振り返る。</li> <li>・学生が出来ていたポイントを伝える。</li> <li>・知っておいて頂きたい知識やポイントを再度確認する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・知っておいて頂きたい知識やポイントを押さえる。</li> <li>・達成感を共有する。</li> </ul>	個人ワークとグループワークのレポート,グループ発表の内容により評価しています。

### **3. 成果・効果**

グループワークと発表前に,学生が個人ワークにて課題に向き合い,それからグループワークに入った方がグループワークの時の意見交換が活性化するようであった。

学生から,「精神科に勤めなくても精神看護は活かされることがわかった」「その事例がしっかり理解できた」など意見があがっていた。

### **4. 課題**

- ・ロールプレイにて発表後,意見交換がなかなか出来ていなかった。
- ・看護 2 年生では基礎学習の段階なので 3 年生でこの内容をいれた方がよいと思われた。
- ・精神看護をもっと興味がわくように学生のニーズ,医療現場のニーズを把握したうえで講義内容を変更していきたい。

### **5. 資料**

授業科目：	英語Ⅱ		
科目区分：	全学共通教育	受講者数：	30名
担当者：	本岡直子（保健福祉学部看護学科）		
アクティブ・ラーニングのタイプ：	参加型		
キーワード（具体的なAL手法等）：	グループワーク		

## 1. 授業の概要と目標

本授業科目では、語彙力・文法力を駆使し、多読・速読ができる、書き手の意図を的確にとらえることができる、英文読解を通して、文化や社会問題等についての理解を深める、等を目標としており、対面形式で実施している。

## 2. アクティブ・ラーニング導入の具体的な流れ

○科目名 英語Ⅱ 第3回

段階	指導過程・学修活動	指導上の留意点（工夫）	評価方法
導入	前時の内容の振り返り（20分） ・復習小テスト ・前回の課題の解説	前回の課題について、間違いの多かった点について解説する。	小テストの結果や課題の結果は評価の一部とする。
展開	英文を読みながら、ワークシートの問題に取り組む。  あらかじめ組まれているグループで、ディスカッション。  クラス全体で共有。  テキストの問題にも同様に取り組む。	ワークシートの回答について発表して、正解を確認する。  適宜補足説明を行う。  理解不足だった場合どのように理解へと結びつけるかの説明を工夫する。	ワークシートは提出して、その内容を確認する。
まとめ	宿題として準備していた各テーマに対するプレゼンテーション用資料を作成する。（20分）		各グループが作成した資料の内容を評価

### **3. 成果・効果**

ワークシートや教科書の問題にグループで取り組むことにより、間違っているもとりにあえず自分の意見をいう姿勢を育成することができたと考える。

内容を理解し、またそれを利用して英語を発信する、ということにつなげる活動ができたと考える。

### **4. 課題**

あらかじめグループごとに資料を準備しておくようにと指示を出しておいたが、グループによって準備の内容が全く異なり、プレゼンテーション用資料の完成度が異なった。また、協調性のない、あまり話し合っている様子が見られないグループがあった。

グループワークの場合、グループ格差が生まれるのは仕方がないことではあるが、それをどう是正するかが課題である。

### **5. 資料**

ワークシート、テキスト、パワーポイント資料

授業科目：	認知症看護論		
科目区分：	看護学科専門科目	受講者数：	30名
担当者：	山中道代，渡辺陽子（保健福祉学部看護学科）		
アクティブ・ラーニングのタイプ：	参加型		
キーワード（具体的なAL手法等）：	協同学習		

## 1. 授業の概要と目標

本授業は協同学習により展開し，認知症の病態と症状，主な治療法について理解することを目標に，最終成果物として学習内容をまとめた冊子および病態・症状・治療法を分かりやすくまとめた一覧を作成している。

## 2. アクティブ・ラーニング導入の具体的な流れ

○科目名 認知症看護論 第4回，第5回 授業テーマ：認知症の病態，治療と看護

段階	指導過程・学修活動	指導上の留意点（工夫）	評価方法
導入1	（第3回授業終了後）協同学習のすすめ方に関するオリエンテーションと事前準備の提示	事前準備ができていなければ，グループワークが進まないことを伝える。	
導入2	本時に行うこと，時間配分，終了時の成果などの説明（10分） 最終提出物（病態等をまとめた一覧）作成についての説明（5分）	提出課題を事前に示すことで，学修意欲を刺激する	
展開	<p><b>グループワーク</b>：専門家グループ 事前に準備した資料を基に，担当する内容について A4 2～4 枚の資料を作成する。（60分）</p> <p>休憩時間 この間に資料の印刷を行う</p> <p><b>プレゼン</b>：協同学習グループ グループワークで作成した資料を印刷し配布する。各項目の専門家が自分のグループ内でプレゼンする。（80分） 説明 8分，質問 5分</p>		<p>ワーク中に巡回し，グループワークへの参加度を確認</p> <p>プレゼンの様子，プレゼン内容に対する質問を確認</p>
まとめ	本字の活動の振り返り（5分） シャトルペーパーへの記入（5分）		

### 3. 成果・効果

グループワークは5人程度の小グループなので、全員が熱心に取り組んでいる。事前学習が十分にできているほど、グループワークが活発に行えている。協同学習グループ内で必ずプレゼンしなければならないことから、各自が内容を理解しようとしている。

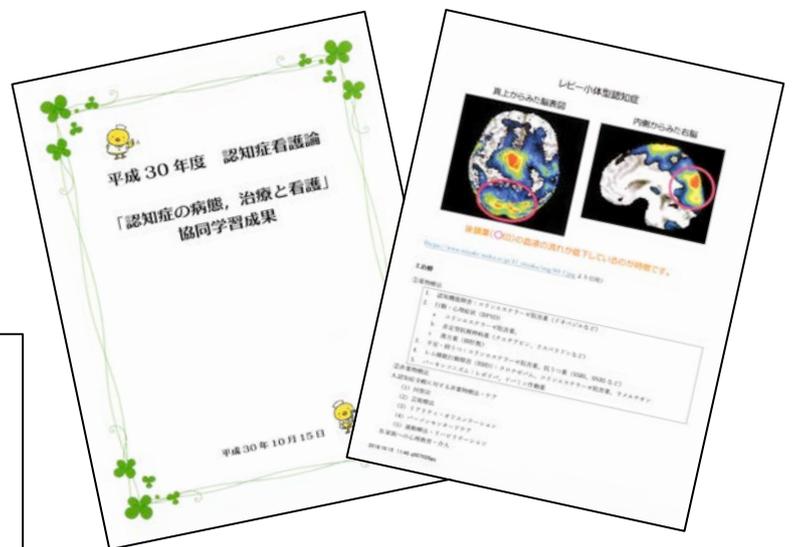
病態を教えようとする、授業中居眠りする学生が何人かいるが、この時間に居眠りをする学生はいない。

### 4. 課題

協同学習は学生が真剣に取り組むことができる手法であることから、今後も導入していきたいと考えている。しかし、グループ人数に偏りが生じる場合の展開方法が確立できていない。

課題の量が多いのか、グループワークにかかる時間が思いの外多くなる。90分で終わられるようなコンパクトな展開方法についても工夫していきたい。

### 5. 資料



グループワークで作成した資料を冊子にし、協同学習グループでのプレゼン資料とする。

認知症看護論	アルツハイマー型認知症	脳血管性認知症	レビー小体型認知症	前頭側頭型認知症
<b>病</b> 神経細胞にβアミロイド(蛋白の一環)沈着、神経線維にβアミロイド(蛋白の一環)の蓄積が起る。アミロイド沈着の増進、老人斑、タウ蛋白の蓄積により神経線維の構造が崩壊し、神経細胞の機能が低下し、認知症の症状が現れる。βアミロイド沈着は、神経線維の構造を崩壊させる原因の一つである。また、アミロイド沈着は、神経細胞の機能を低下させる原因の一つである。また、アミロイド沈着は、神経細胞の機能を低下させる原因の一つである。	脳血管性病変とは、脳梗塞や脳出血など脳血管障害によって起る認知症をいう。脳血管性病変は、脳梗塞や脳出血など脳血管障害によって起る認知症をいう。脳血管性病変は、脳梗塞や脳出血など脳血管障害によって起る認知症をいう。	レビー小体型認知症では、レビー小体の大量沈着が特徴である。脳神経細胞の細胞内に、αシヌクレインが蓄積し、神経細胞の機能を低下させる。また、αシヌクレインは、神経細胞の機能を低下させる原因の一つである。また、αシヌクレインは、神経細胞の機能を低下させる原因の一つである。	前頭側頭型認知症とは、前頭葉や側頭葉の神経細胞が萎縮する認知症である。前頭葉は、認知行動や人格を司る部位である。側頭葉は、言語や記憶を司る部位である。前頭側頭型認知症は、前頭葉や側頭葉の神経細胞が萎縮することによって起る認知症である。	
<b>病</b> アルツハイマー型認知症は、神経細胞にβアミロイド(蛋白の一環)沈着、神経線維にβアミロイド(蛋白の一環)の蓄積が起る。アミロイド沈着の増進、老人斑、タウ蛋白の蓄積により神経線維の構造が崩壊し、神経細胞の機能が低下し、認知症の症状が現れる。βアミロイド沈着は、神経線維の構造を崩壊させる原因の一つである。また、アミロイド沈着は、神経細胞の機能を低下させる原因の一つである。また、アミロイド沈着は、神経細胞の機能を低下させる原因の一つである。	脳血管性病変とは、脳梗塞や脳出血など脳血管障害によって起る認知症をいう。脳血管性病変は、脳梗塞や脳出血など脳血管障害によって起る認知症をいう。脳血管性病変は、脳梗塞や脳出血など脳血管障害によって起る認知症をいう。	レビー小体型認知症では、レビー小体の大量沈着が特徴である。脳神経細胞の細胞内に、αシヌクレインが蓄積し、神経細胞の機能を低下させる。また、αシヌクレインは、神経細胞の機能を低下させる原因の一つである。また、αシヌクレインは、神経細胞の機能を低下させる原因の一つである。	前頭側頭型認知症とは、前頭葉や側頭葉の神経細胞が萎縮する認知症である。前頭葉は、認知行動や人格を司る部位である。側頭葉は、言語や記憶を司る部位である。前頭側頭型認知症は、前頭葉や側頭葉の神経細胞が萎縮することによって起る認知症である。	
<b>病</b> アルツハイマー型認知症は、神経細胞にβアミロイド(蛋白の一環)沈着、神経線維にβアミロイド(蛋白の一環)の蓄積が起る。アミロイド沈着の増進、老人斑、タウ蛋白の蓄積により神経線維の構造が崩壊し、神経細胞の機能が低下し、認知症の症状が現れる。βアミロイド沈着は、神経線維の構造を崩壊させる原因の一つである。また、アミロイド沈着は、神経細胞の機能を低下させる原因の一つである。また、アミロイド沈着は、神経細胞の機能を低下させる原因の一つである。	脳血管性病変とは、脳梗塞や脳出血など脳血管障害によって起る認知症をいう。脳血管性病変は、脳梗塞や脳出血など脳血管障害によって起る認知症をいう。脳血管性病変は、脳梗塞や脳出血など脳血管障害によって起る認知症をいう。	レビー小体型認知症では、レビー小体の大量沈着が特徴である。脳神経細胞の細胞内に、αシヌクレインが蓄積し、神経細胞の機能を低下させる。また、αシヌクレインは、神経細胞の機能を低下させる原因の一つである。また、αシヌクレインは、神経細胞の機能を低下させる原因の一つである。	前頭側頭型認知症とは、前頭葉や側頭葉の神経細胞が萎縮する認知症である。前頭葉は、認知行動や人格を司る部位である。側頭葉は、言語や記憶を司る部位である。前頭側頭型認知症は、前頭葉や側頭葉の神経細胞が萎縮することによって起る認知症である。	
<b>病</b> アルツハイマー型認知症は、神経細胞にβアミロイド(蛋白の一環)沈着、神経線維にβアミロイド(蛋白の一環)の蓄積が起る。アミロイド沈着の増進、老人斑、タウ蛋白の蓄積により神経線維の構造が崩壊し、神経細胞の機能が低下し、認知症の症状が現れる。βアミロイド沈着は、神経線維の構造を崩壊させる原因の一つである。また、アミロイド沈着は、神経細胞の機能を低下させる原因の一つである。また、アミロイド沈着は、神経細胞の機能を低下させる原因の一つである。	脳血管性病変とは、脳梗塞や脳出血など脳血管障害によって起る認知症をいう。脳血管性病変は、脳梗塞や脳出血など脳血管障害によって起る認知症をいう。脳血管性病変は、脳梗塞や脳出血など脳血管障害によって起る認知症をいう。	レビー小体型認知症では、レビー小体の大量沈着が特徴である。脳神経細胞の細胞内に、αシヌクレインが蓄積し、神経細胞の機能を低下させる。また、αシヌクレインは、神経細胞の機能を低下させる原因の一つである。また、αシヌクレインは、神経細胞の機能を低下させる原因の一つである。	前頭側頭型認知症とは、前頭葉や側頭葉の神経細胞が萎縮する認知症である。前頭葉は、認知行動や人格を司る部位である。側頭葉は、言語や記憶を司る部位である。前頭側頭型認知症は、前頭葉や側頭葉の神経細胞が萎縮することによって起る認知症である。	

最終提出物の一例

授業科目：	統合実習		
科目区分：	看護学科専門科目	受講者数：	60名
担当者：	岡田麻里, 井上誠, 伊藤良子, 木村幸生, 片山友里, 近藤美也子, 土路生明美, 船橋眞子, 安田千香 (保健福祉学部看護学科)		
アクティブ・ラーニングのタイプ：	行動型・参加型・ <b>複合型</b> (※行動型・参加型ALを組み合わせで実施)		
キーワード (具体的なAL手法等)：	事前学習 (個人学習)、グループワーク、ロールプレイ、臨地実習 (シャドウイング・インタビュー、ラベルワーク (振り返り)、プレゼンテーション)、ワールドカフェ		

## 1. 授業の概要と目標

既修の知識と技術及び態度を統合し、専門的な看護実践をするために、医療チームの実践のなかで、多様な状況を判断し、対応するための思考プロセスを学ぶ。

1. 医療チームにおける看護師の役割と実践を理解する
2. 複数の業務と受け持ち患者の看護において、看護師が直面する多重課題に対応できる看護実践能力を理解する
3. 医療チームの一員として、効果的なコミュニケーションを図ることができる
4. 病院組織における看護管理の実際を理解する
5. 医療チームの一員として自覚を高め、自己の課題を明らかにすることができる

## 2. アクティブ・ラーニング導入の具体的な流れ

○科目名：統合実習 (多重課題演習・シャドウイング実習) 3年次生 後期 2単位 60時間

段階	指導過程・学修活動	指導上の留意点 (工夫)	評価方法
1 か月前	<b>【事前学習 (個人学習)】</b> ・統合実習 (多重課題演習・シャドウイング実習) オリエンテーション ・実習要綱および事前課題の配布	演習および実習に臨むための知識と技術の整理 1)医療安全管理に関する用語をまとめる 2)実習先病院・病棟の概要・入院患者の特徴をまとめる 3)多重課題演習に必要な知識と技術をまとめる	実習 1 日目にレポートを担当教員へ提出 作成したレポートを基に演習に臨む
1 日目	多重課題の事例展開:先輩看護師のサポートを得て、4人部屋の患者を新人看護師の立場で男性患者を受け持つペーパーシュミレーション <b>【グループ・ディスカッション】</b> 場面 1: 申し送りを受けた後の検温 場面 2: 患者の清拭中に、別の患者の検査終了のお迎えに呼ばれる <b>【ロールプレイ】</b> 場面 3: 部屋をかえて欲しいという患者への対応 場面 4: 糖尿病の高齢夫婦への食事	・チームナーシングにおけるメンバー看護師の立場で、受け持ち患者をアセスメントし看護ケアの優先度を判断するための思考過程を踏めるように促す ・チームで多重課題に対応するための看護実践能力とは何かを考え、演習で得た分からないことや看護師に質問したいこと、	グループワークやディスカッションへの積極的な参加と態度 他の学生の意見を聞く姿勢 実習に向けた準備性

	指導中に点滴漏れのナースコールへの対応 【ラベルワーク】 【プレゼンテーション】	シャドウイング実習での観察ポイントを意識化し、まとめるように促す ・各グループに学修支援アドバイザー（4年次生）を配置し、ファシリテーション・助言・自分の実習経験を語る等の役割を担ってもらう	
2～4 日目 臨地 実習	1日目のみ 【看護部長の病院紹介および新人教育に関する講話（40分程度）】 【病棟師長の病棟オリエンテーション】 1～3日目 【師長・リーダー・受け持ち看護師へのシャドウイング実習（グループでローテーション）】 【朝・夕の申し送りへの参加】 3日目のみ 【ラベルワークによる振り返り】 【ナースステーションでの学びのプレゼンテーション】	シャドウイング中は、学生は担当看護師に積極的に自ら関係性を築けるように質問し、看護ケアを補助するよう促す シャドウイング中も患者や家族への配慮を忘れないように促す シャドウイング終了後、担当教員へ報告、振り返りを行う	教員との振り返り 実習記録 カンファレンスへの参加 プレゼンテーション
ま と め	【グループワーク】 ・演習・実習を通し「多重課題に対応する看護実践能力と自己の課題（サブテーマ）」を決める ・グループでラベルワークを活用し、学びの内容を振り返り話し合う 【ワールドカフェ形式】		ワールドカフェ形式グループワークへの参加 まとめの記録

### 3. 成果・効果

1～3年次で学修した内容を振り返り、既修の知識や看護技術を実践現場で活用するために統合し、自分の課題を見つめる機会となっている。多重課題は、日々の学生生活でも生じており、限られた時間のなかで優先順位を判断し、倫理的側面からも考え行動することを学んでいる。

シャドウイング実習で看護師の一日の動き方や思考過程の学びを通して、病棟看護師の忙しさの意味の理解につながっている。そのため、受け持ち患者に関する連絡・報告・相談のタイミングを計り、方法を考えられるなど、実践的なコミュニケーション技術の修得につながっている。

学修支援アドバイザーとしてかかわる4年次生にとっては、1年前の自分を振り返り自らの成長を感じる機会となっている。3年次生への助言、ファシリテーション、自分の経験を伝えることを通して、“教える”ことを学ぶ機会となっている。

### 4. 課題

実習指導者から、個人差は大きいですが、シャドウイング中の学生の自発性や積極性が低いという指摘がある。前日の多重課題演習を通して自己の課題の意識化、実習への心構えと自覚、具体的なイメージをもたせる。他大学と異なる本学独自の統合実習の目的を実習現場と共有し、シャドウイングを通じた学生指導のあり方を検討する必要がある。

## **5. 資料**

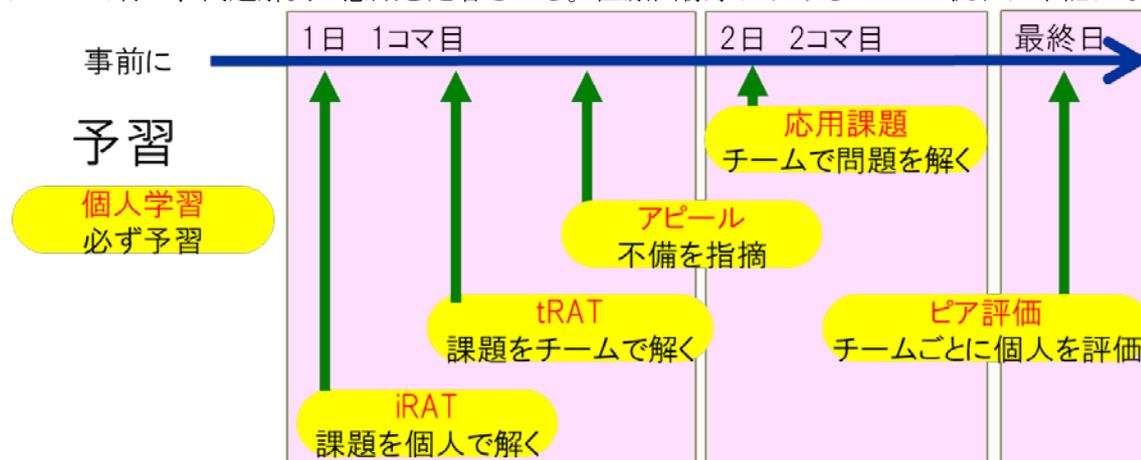
- 1) 岡田麻里, 今井多樹子, 井上誠, 近藤美也子, 土路生明美, 船橋眞子, 永井庸央, 松森直美 (2017) : 既修の知識と技術を統合する多重課題演習とシャドウイング実習から得られた3年次看護学生の学び, 日本看護科学会誌, 37 : 446-455.
- 2) 今井多樹子, 岡田麻里, 永井庸央, 船橋眞子, 井上誠, 近藤美也子, 木村幸生, 土路生明美, 松森直美 (2017) : 学年進行と共に段階的に進める「看護の統合と実践」における教育に関する研究—各論実習前に実施した統合実習の教育的有用性と課題の検討—, 人間と科学, 県立広島大学保健福祉学部誌, 17(1), 28-39.
- 3) 岡田麻里, 今井多樹子, 近藤美也子, 井上誠, 木村幸生, 宮本奈美子, 土路生明美, 船橋眞子, 滝口里美, 松森直美 (2016) : 各論実習を修了した4年次生の多重課題演習における学び, 県立広島大学総合教育センター紀要, 1, 61-68.
- 4) 岡田麻里, 今井多樹子, 井上誠, 近藤美也子, 土路生明美, 船橋眞子, 永井庸央 (2016) : 多重課題を中心とした統合実習の効果と課題—チームナーシングを实践するための思考を育てる多重課題演習と車道院議実習, 看護人材育成 : 日総研出版, 13(3), 54-64.

授業科目：	医療画像学		
科目区分：	理学療法学科専門科目	受講者数：	3年生 30名
担当者：	飯田忠行（保健福祉学部理学療法学科）		
アクティブ・ラーニングのタイプ：	行動型 ・ 参加型 ・ <b>複合型</b> （※行動型・参加型ALを組み合わせて実施）		
キーワード（具体的なAL手法等）：	Team Based Learning		

## 1. 授業の概要と目標

### 【概要】

医用画像は理学療法学科の必修科目となっており、国家試験にも出題される。そして、機器の発達により、一般撮影（X線写真）のみではなく、CT、MRI、超音波、これらの画像の多岐にわたる。したがって、画像をどのように構成するのかといった基本知識を予習資料から個人で学修し、習得する。習得状況について、個人では個人テスト（iRAT）にて把握し、チームではiRATと同一の問題を何も資料も持たず、チームで話し合いながら解答を導き出す（tRAT）にて把握する。また、tRATの問題のディスカッションにおける疑問点や改善点に関するコメントをアピール用紙で作成・提出する。このことで、積極的な知識の習得を行う。その後、応用課題をチームで取り組む。応用課題では、これまで使った教科書およびHPを参考にし、ディスカッションをチームで行い、問題解決の意識を定着させる。医療画像学におけるTBLの流れは下記になる。



### スケジュール

1: ガイダンス TBLの進め方

X線画像 予習

2: X線画像 iRAT tRAT アピール

3: X線画像 応用課題

CT 予習

4: CT iRAT tRAT アピール

### MRI 予習

5: MRI iRAT tRAT アピール

6: CT、MRI(頭部)応用課題

7: CT、MRI(頭部以外)応用課題

8: ピア評価

### 【目標】

- (知識)
- ・ 医療で使われる画像を観察するときの基本的な注意事項がわかる。
  - ・ 様々な画像検査法とその画像について特徴を簡潔に説明できる。
- (技能)
- ・ いろいろなモダリティの画像について、組織と画像信号の関係がわかる。

- (態度) ・代表的な疾患について、典型的な画像を観てどの疾患かわかる。  
 ・いろいろな疾患の画像を用いてグループワークを行い、人間関係を深めると同時に疾患および画像の理解を深める。

## 2. アクティブ・ラーニング導入の具体的な流れ

### ○医療画像学

段階	指導過程・学修活動	指導上の留意点（工夫）	評価方法
導入	<p>1.TBL の概要説明および採点基準の説明</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・TBL の流れ、内容を説明し、成績評価説明（個人成績とチーム成績の配分）</li> </ul> <p>2.事前学修（X線画像、CT、MRI）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・予習資料の配布</li> <li>・講義時間外に個人で学修を行う。</li> <li>・基本的事項および臨床例を含む。</li> </ul>	<p>TBL での講義の流れおよび事前学修の必要性の説明。</p> <p>ピア評価（貢献度）を含めた成績評価基準を明確にする</p> <p>予習資料の作成</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・基本知識</li> <li>・臨床例</li> </ul>	
展開	<p>3.iRAT（2, 4, 5回目）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・事前学修を課した次のコマの冒頭20分で実施。</li> <li>・個人学習到達度の把握</li> <li>・五者択一式または五者択二式の問題を10問出題</li> </ul> <p>4.tRAT（2, 4, 5回目）</p> <p>同一の問題を資料を見ずにディカッションしながら解答を導く。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・チームの学習到達度の把握</li> </ul> <p>5.アピール（2, 4, 5回目）</p> <p>疑義について、チームで話し合い教員に提出。</p> <p>学生に疑義の意図をその場で説明させ、認められたら加点。</p>	<p>RAT に用いる小テスト問題を予習資料を網羅する必要がある。</p> <p>また、明らかな解答がすぐに求まる問題ではなく、紛らわしく悩む問題を作成する</p> <p>ディスカッションに参加していない学生に対して、教員側が声をかけ促す。</p> <p>加点を促すことで、チームで疑義をディスカッションする</p>	<p>iRAT tRAT （小テスト：選択問題）</p> <p>アピール</p>
まとめ	<p>6.応用課題（3, 6, 7回目）</p> <p>自由記載の課題を実施。</p> <p>臨床例を多く表示し、病変のみの理解ではなく、病変から引き起る障害についてまで学修する。</p> <p>今までの学んだ知識と医療画像を融合させ、解をチームで導く。</p> <p>7.ピア評価</p> <p>チーム内における個々の貢献度を評価する。</p>	<p>応用課題では、これまで習ってきた疾患や障害を医療画像と紐づけすることをチームディカッションを行うことで解を導くことを促す。</p> <p>他人の評価を嫌うが、なぜその貢献度になっているのかを個々に対して「よかった点」「改善すると良い点」を記載させる。</p>	<p>応用課題 （自由記載）</p> <p>ピア評価</p>

		きちんと個々をみて、評価するように促す。	
--	--	----------------------	--

### **3. 成果・効果**

医療画像学で用い、学生の「受講満足度」「学習到達度」「行動変容度」「成果達成度」を評価した（カークパトリックモデル：浅野.2002）。

「受講満足度」「成果達成度」は、概ね良好な結果を得た。講義自体の内容が学生のニーズとマッチしていた結果だと考えられる。本講義を受講した学生は、国家試験を受験する。そのため、講義内容が国家試験に直結するため、真摯に学び、内容も国家試験に近かったので、満足度ならびに達成度が高かったものと考えられる。

学習到達度においては、概ね良好な結果を得た。正答率が悪かった、もしくは、差が認められなかった設問は、5つの選択肢のうち正解を2択するといった問が多く、学修者にはより深い知識の定着が必要だと思われる。

行動変容度においては、事前に学修資料を配布したにも関わらず、そう思わないと答えたものもあり、魅力的な資料作りが必要だと思われる。また、先述した国家試験の指定科目ではあるが、他の科目と比べると出題数が少ないため、「この授業の内容に関してさらに学びたい。」といった項目で「そう思わない」と答えたものがいたと考えられる。

### **4. 課題**

過去の疾患および障害との結びつきは出来ているように感じるが、実際の臨床では多種多様な症例を見る。したがって、学修者にはより深い知識の定着とそれを「習ったことがある」、「みたことがある」といった引き出せる臨機応変な対応力、応用力が必要である。したがって、多くの症例写真を組み込む必要がある。

### **5. 資料**

飯田忠行, 三木洋一郎, 北川周子, 細川淳嗣, 田中聡, 川原田淳, 馬本勉, 今泉敏. Moodle を用いた TBL システムの構築－学生の理解度を含めて－. 人間と科学 県立広島大学保健福祉学部誌 16 (1) : 89-93. 2016.

飯田忠行, 三木洋一郎, 北川周子, 江崎 誠治, 細川 淳嗣, 川原田 淳. TBL 評価と性格特性との関連. 第 46 回日本医学教育学会 (札幌). 2017.

<b>授業科目：</b>	医療行動科学		
<b>科目区分：</b>	保健福祉学部専門領域理解の基礎となる科目	<b>受講者数：</b>	40～60 人程度
<b>担当者：</b>	細羽 竜也（保健福祉学部人間福祉学科）		
<b>アクティブ・ラーニングのタイプ：</b>	行動型 ・ <b>参加型</b> ・ 複合型（※行動型・参加型ALを組み合わせて実施）		
<b>キーワード（具体的なAL手法等）：</b>	課題調査，グループワーク，プレゼンテーション，ワークシート		

## 1. 授業の概要と目標

### 【授業の概要】

本講義では、行動理論、健康心理学、社会心理学を基盤に、患者・当事者の心理状態と行動特性、ストレスと対処行動、医療福祉場面や生活場面での人間関係の影響などを理解するための基礎理論について講義する。具体的には、以下のテーマを扱う。

- ①心理社会的ストレスの疾患・障害への影響
- ②健康に影響を与える行動問題と対策
- ③国民に健康増進の意識を育成するための包括的な取り組み

### 【授業の目標】

この授業では、履修学生の到達目標を以下のように設定する。

《知識・技能の観点》①医療行動科学に関する基本的知識を理解し説明できる。②疾病や障害、援助に関して行動論的な解釈を理解し説明できる。

《思考・判断・表現の観点》①医療上や生活上における健康問題に意識を向けることができるようになる。②得られた知識を活用し、問題解決に活用することができる。

《主体性・協働性の観点》授業で関心を持った内容を調べて、他の人にわかりやすく説明することができる。

## 2. アクティブ・ラーニング導入の具体的な流れ

○科目名「医療行動科学」

第 14 回 授業テーマ「生活習慣改善の試み③：健康教育の考え方：行動変容の技術を学ぶ」

段階	指導過程・学修活動	指導上の留意点（工夫）	評価方法
導入 15分	(1) 小テスト（5分） (2) 前時の内容の振り返り（7分） (3) 本時の目標の理解（3分） 目標：生活習慣改善プラン（資料2）を作成させる。	(1) (2) 前時の要点の復習と疑問点の解消を行い、知識の定着を図る。 (3) 本時の学修の流れと目標を理解させる。	小テスト（5点満点）
事前準備	<授業前の課題>第7回・第9回・第11回の授業において、日常生活上での生活習慣の行動変容の取り組みをレポート課題として課している。加えて、前時の授業において、課外学修の成果を資料1に示した	各レポート課題で取り組む目標と実施方法を明示して取り組ませる。前時においては、資料1のように参考資料を示し、これまでの取り組み	各レポート課題（5点満点） 資料1作成（10点満点）

<p>展開 60分</p>	<p>形式でまとめさせ、本時に持参させた。</p> <p>(1) 基本事項の説明 (20分)</p> <p>(2) グループワーク (10分) 4人程度のグループを形成し、事前の課外学修で各々が作成した資料1について、プレゼンテーション及びディスカッションを行う。</p> <p>(3) 生活習慣改善プラン(ワークシート:資料2)の作成 (20分) ①行動目標の作成:説明とシート記入 ②記録方法:説明とシート記入 ③現在の生活習慣の状況:説明とシート記入 ④介入後の生活習慣の状況:説明とシート記入</p> <p>(4) グループワーク (10分) (2)のグループを用いて、課外学修の成果を踏まえながら、自らが作成した生活習慣改善プラン(資料2)について、プレゼンテーション及びディスカッションを行う。</p>	<p>をまとめさせる。</p> <p>(2) 事前に配席表を示し、すぐにグループワークが実施できる体制を整える。自分たちの取り組みを、(1)の基本事項を踏まえながら、振り返らせる。</p> <p>(3) ワークシートの記入が適切に出来るように、講義内容とシート記入の方法を関連付けて説明する。</p> <p>(4) ワークシートの内容を学生相互に確認させ、生活習慣を変容するための適切なプランニングになっているか確認させる。</p>	<p>資料2作成(10点満点)</p>
<p>まとめ 15分</p>	<p>(1) 本時の授業内容のまとめを行う。(5分)</p> <p>(2) 個人学修:リアクションペーパーに、本時の授業で学んだことや質問事項等を記述させる(10分)</p>	<p>(1) 本時の授業の要点を示しながら説明する。</p> <p>(2) 提出後、授業終了とする。リアクションペーパーの内容は毎回評価していることを事前に説明しておく。</p>	<p>(2) リアクションペーパーの評価 (3点満点)</p>

### 3. 成果・効果

リアクションペーパーを確認すると、自らの生活習慣の改善に意欲を示したり、また授業内容について適切な知識と実践に裏付けられた技術を得たとの報告が多かった。単なる知識の提供ではなく、個人あるいはグループでの主体的な学修機会を設けることで、知識の活用意欲を促進したと考えている。またグループワークを取り入れることで、各課題への意欲が向上した。

#### **4. 課題**

授業中に取り組む内容が多いため、段取り良く進めないと 90 分を超えてしまう。しかし速いペースを進めると、グループワークが乱雑になったり、ワークシートの記入が不十分であったりすることがある。取り組む課題の焦点化が課題となる。

#### **5. 資料**

資料 1：課外学修の成果（事前作成資料）：例示

資料 2：生活習慣改善プラン（ワークシート）：例示

# 医療行動科学 授業外学修⑥レポート

学籍番号 \_\_\_\_\_

氏名 \_\_\_\_\_

○行動目標 階段を1日500段上る（下りるのは計算に入れない）

【①ベースライン（6月13日提出）】



【②先行子操作（6月27日提出）】



【③強化手続き（7月11日提出）】



## 【所見】

- ベースライン時から，行動目標を意識し，階段を用いる日が増えた。
- 行動目標シートを1日1回見るようにすると，ベースライン時より上った階段が増えた。
- 家族に報告すると，報告を楽しみにされたので，朝夕に意識的に階段を上るようにした。目標を達成できた。

# 生活習慣改善プラン（例）

学籍番号 \_\_\_\_\_ 氏 名 \_\_\_\_\_

## ① 行動目標

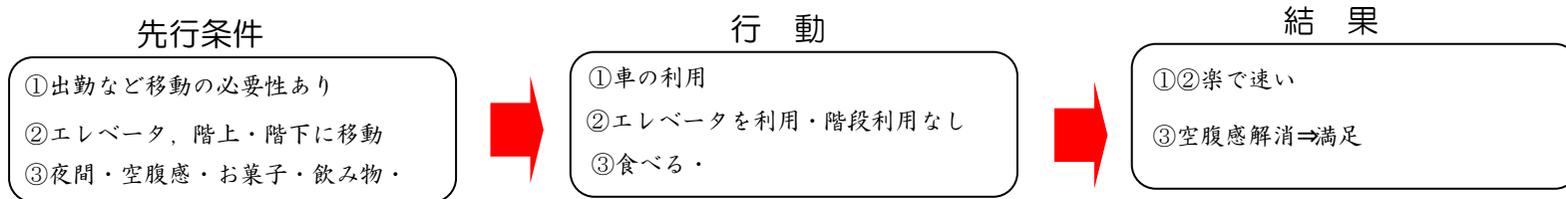
<問題となる状況> 肥 満 ⇒ <問題となる行動> ①②運動する機会が少ない・③間食が多い

<達成基準> ①1日20分の歩行 ②階段を日に3回使う ③夜9時以降の間食禁止

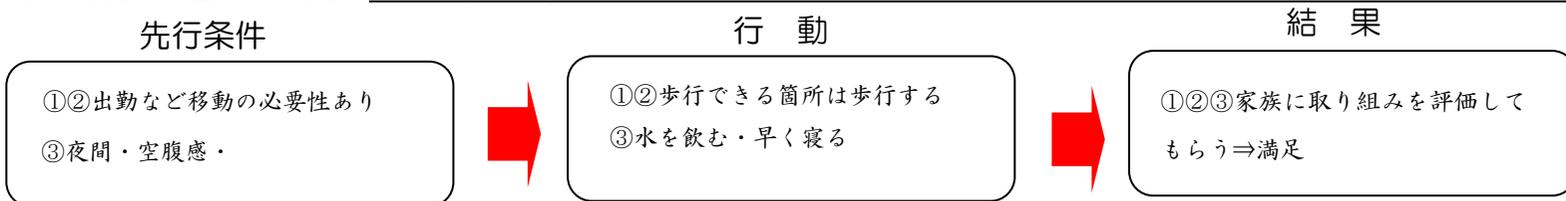
## ② 記録の取り方

①1日の歩行時間の計測（分単位：野外移動のみ） ・ ②1日の階段利用回数 ・ ③夜9時以降の摂食回数 どれもグラフ化

## ③ 介入前の行動随伴性



## ④ 介入後の行動随伴性（介入方法：代替行動を家族に報告・フィードバック<オペラント強化>）



授業科目：	社会福祉援助技術論 I		
科目区分：	人間福祉学科専門科目	受講者数：	41
担当者：	江本純子（保健福祉学部 人間福祉学科）		
アクティブ・ラーニングのタイプ：	行動型 ・ <b>参加型</b> ・ 複合型（※行動型・参加型AL を組み合わせて実施）		
キーワード（具体的なAL手法等）：	グループワーク、グループディスカッション、プレゼンテーション		

## 1. 授業の概要と目標

講座の目標は、ソーシャルワーク理論・知識の習得、および理論を実践で活用するための方法を学習すること（シラバスより引用）である。授業は、主としてディスカッションやグループワークを交えた講義形式で実施している。

今回は、第 14 回、第 15 回連続で実施した授業を報告する。この授業は、第 1 回から第 13 回の授業で学んだソーシャルワーク理論の定着と実践での応用力を培うことを目的としている。

## 2. アクティブ・ラーニング導入の具体的な流れ

○科目名 社会福祉援助技術論 I 第 14 回 ソーシャルワーク技術の応用（1）

段階	指導過程・学修活動	指導上の留意点（工夫）	評価方法
導入 5分	第 14 回、15 回受授業目的・目標および、内容とスケジュールの理解	今回・次回は、これまで学習したソーシャル技術応用の授業であることを理解させる。	
展開 80分	基本事項の説明（10分） <b>課題提示</b> ソーシャルワーク事例について視聴覚教材（DVD）をもとに提示する、（40分）  <b>グループワーク</b> 5~6名のグループになり、課題を話し合い、このうえで次回発表用の資料を作成する。（30分）	課題の理解を深めるよう手順を示す*。 （*ソーシャルワーカーとして当事者とかかわるとしたら、どう支援するか、①ケース概要、②アプローチ名、③援助目標、④援助展開、⑤留意点、⑥まとめと感想）  グループワークが順調に進むよう、指示内容を明確にする。	
まとめ 5分	課題進行状況の報告、次回報告のための準備（授業外学習内容・時間設定、役割分担）（5分）	発表資料提出日を指定し、締切以降に発表順を決定し、配布資料の印刷をする。	

## ○科目名 社会福祉援助技術論 I 第 15 回 ソーシャルワーク技術の応用 (2)

段階	指導過程・学修活動	指導上の留意点 (工夫)	評価方法
導入 10 分	第 15 回授業目的・目標および、 内容とスケジュールの理解 (10 分)	授業目的を確認し、スケ ジュールを伝える。 資料配布。	
展開 70 分	プレゼンテーション 10 分×7 グループで作成資料に基 づいた発表と質疑応答を行う。	参加者が報告内容を理 解しやすいよう、報告順 を工夫する。 報告方法・質疑方法の説 明をする。 充実した報告・質疑が手 順よくできるよう、詳細 な時間設定をし、タイム キーパー、司会の仕方も 指定する。	
ま と め 10 分	教員からの講評を聞き、内容につい てさらに理解を深める。 質疑内容および教員のコメントを 受けて、考えを深める。 (授業外学習) 個々にレポートを作 成し、期日までに提出する。	全体的な講評を行うと とともに、グループ別に 詳細なコメントを述べ る。 最終課題の提示を行う。	個別に作成したレ ポートで評価する。

**3. 成果・効果**

授業評価アンケートでは、ほぼ全員が「授業に集中し、真剣に取り組んだ」「授業時間外に取り  
組むべき課題が示された」「ディスカッションやグループワークのような能動的学習機会があった」  
と回答しており、一定の効果があったと考える。

**4. 課題**

学生間の質疑応答の充実および時間節約のため、展開時は、学生のコメントのみで、教員は最  
後に講評を行った。しかし、学生の理解を深める上でも、教員のコメントを入れるタイミングに  
ついて検討したい。

**5. 資料**

DVD、ワークシート、発表用資料集

授業科目：	社会福祉援助技術演習Ⅱ		
科目区分：	人間福祉学科専門科目	受講者数：	21
担当者：	松宮透高（保健福祉学部 人間福祉学科）		
アクティブ・ラーニングのタイプ：	行動型 ・ 参加型 ・ 複合型（※行動型・参加型ALを組み合わせて実施）		
キーワード（具体的なAL手法等）：	ロールプレイ グループワーク		

## 1. 授業の概要と目標

本授業の目標は「相談援助を行う際に必要となる基礎的な知識と技術について、演習を通して実践的に習得すること」（シラバス）にある。この中で、自ら実習で体験した場面をロールプレイで「再現」し、その場面にみられた①当事者が置かれた環境、②当事者のニーズ、③支援者や支援環境が提供した支援、④その結果、⑤そこから考察したことおよびよりよい対応に向けた対応策、についてグループで検討し、それを「実演」してみることで、その場面を多面的に分析するという構成の授業を行った。

## 2. アクティブ・ラーニング導入の具体的な流れ

○科目名「社会福祉援助技術演習Ⅱ」第11回 授業テーマ「場面の検討とロールプレイ準備」

段階	指導過程・学修活動	指導上の留意点（工夫）	評価方法
導入	前回グルーピングした4～5人チームで着席。 この授業で取り組むこととその目的を改めて確認する（5分）		
展開	1) グループ協議（30分） メンバーの体験から1つを選択し、その状況と背景を検討する。 2) 確定したら、シナリオ化する。 ロールプレイの役割を分担（ナレーター、登場人物）する。 3) 各グループを回り、論点確認 表現したい論点を確認し、適宜アドバイスをして内容の充実を促す。 4) 発表 1 グループを選び、発表をクラスで聴く。質疑とディスカッションを行い、改善案についても発表。 5) コメント 肯定的に評価し、改善案についての方向性の検討を促す。	各メンバーの体験を十分に相互理解した上で、皆の思いを乗せやすい場面を選ぶよう指導。主体的な参加度を上げるよう、役割分担をする。  発表内容が深く意義あるものになるよう、適宜アドバイスを示す。  努力や着眼点、グループの協力度を積極的に評価し、モデリングできる要素を強調する。	議論や作業に参加しない学生がいないか確認し、適宜参加や巻き込みをグループ単位で指導する。
まとめ	次回、残りの発表を行うこと、さらに改善案の実演に向けた検討と準備を行うよう提示	発表への不安を軽減し、モチベーションを高めるような雰囲気づくり。	コメントシートおよびワークの体験をレポートにまとめる。

### **3. 成果・効果**

にぎやかながらも課題への集中がみられ、受講学生が積極的に参画している様子が見られた。ロールプレイの発表においても、よく練られ、論点が明確な場面が描けていた。場面を具体的にすることで、その場面での支援者（実習生）の困難感が実感的に共有でき、より良い対応があったとすればどうすればよいか、また、どうしてそのような状況が発生したのかという重層的な背景への着眼もみられ、「表層的に見ていた場面に、思わぬ深い構造が隠れていたことに気づいた」といった感想がいくつか見られるなど、所期の目標を満たす教育効果が得られたと考えている。

### **4. 課題**

実習体験自体が多様であり、その受け止め方もまた学生によって様々である。今回は見られなかったが、実習施設のあり方への強い疑問が呈され、ネガティブな方向からばかり検討して自らの学びや課題に焦点がなかなか当たらない学生もいる。そうした場合、「問題はあるが、もし自分が責任ある立場としてその問題に取り組むとすれば、どのようにアプローチするか」といった投げかけで、前向きな議論には進んでいく。また、4～5人チームで持ち寄った体験のうち1つを取り上げることから、全員の体験を詳細の検討することはできていない。加えて、実習への不全感や、一種の傷つき体験がある場合、不用意に開示することで気持ちが揺れるリスクはある。常に、「言いたくないことは言わない」「ここで取り上げるテーマにタブーは無いが、外には持ち出さない」「自分たちは切り取られた一場面のみを見ているに過ぎず、また責任ある立場にも立っていないため、表層的にしか現場を捉えていないという限界がある。一方的な非難で終わることは学びにつながらない」といった投げかけはしている。とはいえ、問題に正面から取り組むことを避け問題点の否認を求めているように受け取られるのではないかと気を遣う。

### **5. 資料**

とくに用いない。ポストイットカードに1枚に1テーマ、「忘れられないあの場面」を書き、皆の前で簡略に発表し、黒板に貼っていく。類似性の高いテーマは近くに固め、似た問題意識の学生でグルーピングをする。あとは、各小グループに分かれてシナリオ作成と演じる役柄を決め、発表の練習をする。

<b>授業科目：</b>	生活環境科学		
<b>科目区分：</b>	人間と社会生活の理解に関する 科目	<b>受講者数：</b>	16名
<b>担当者：</b>	吉田倫子（保健福祉学部人間福祉学科）		
<b>アクティブ・ラーニングのタイプ：</b>	参加型		
<b>キーワード（具体的なAL手法等）：</b>	グループワーク，事例検討，ディスカッション，プレゼンテーション		

## 1. 授業の概要と目標

本授業は対面形式で実施している。

将来、専門職として支援を行う患者や利用者が地域の中で生活していくためには、様々な課題がある。そこで、本講義では特に住宅、地域、都市における生活環境の諸問題について論じる。住宅と人間の関係性、地域におけるまちづくり、住宅・都市における法制度などについて学び、住宅や地域の特性に対応した支援ができるようになるための基礎的な知識や技能を習得する。授業内ではグループ学習や住宅設計を通し、生活環境の課題について参加する学生同士で理解を深めていく。

本授業の目標は以下に示す。

《知識・技能の観点》①患者や利用者、地域住民が暮らす住まいや地域についての諸問題を理解し、説明できる。②専門職として支援をするために必要な居住環境に関する基礎的知識について理解し、説明できる。

《思考・判断・表現の観点》事例を通して、高齢者や障害者等が快適に住める環境づくりの課題を指摘できる。

《主体性・協働性の観点》少人数にわかれ、グループ内で共同作業や討論をすることにより、授業に関心を持った内容について、わかりやすく説明したり、他の人の話を聞いて話し合ったりすることができる。

## 2. アクティブ・ラーニング導入の具体的な流れ

○科目名「生活環境科学」 第11回 住まいを計画する方法1

段階	指導過程・学修活動	指導上の留意点（工夫）	評価方法
導入	本時以降の授業の流れと目標の理解（5分） 「介護が必要な親と同居する住宅」	本時以降の学修の流れと目標を理解させる。	
展開	事例の説明（20分） デザイン条件①家族の背景や住宅へのニーズ デザイン条件②土地や地域の状況 デザイン条件③具体的な室数や面積など詳細条件	住まいに関する人、土地、建物に関する条件を説明し、理解させる。 プリントを空欄にしておき、順番にあてながら回答を全員で埋めていく。	

	<p><b>グループワーク</b></p> <p>事例についてワークシートの課題に沿って話し合う。話し合った結果を発表する。</p> <p><b>演習 1</b> 老化現象とデザイン上の配慮を振り返り、住宅のコンセプトを考える  <b>発表</b> グループの代表者が発表</p> <p><b>演習 2</b> 必要なデザイン上の配慮について考える  <b>発表</b> グループの代表者が発表</p> <p><b>演習 3</b> 部屋の配置を考える  <b>発表</b> グループの代表者が発表</p>	<p>演習 1・2 では、これまでの授業を振り返り、プリント等を見ながら、事例に当てはめて考えさせる。</p> <p>演習 3 では、自分たちの考えを具体的な住宅設計に反映するため、言葉で整理させる。</p> <p>それぞれの演習毎にグループ発表を行うことで、互いの意見から知識や視点を学ばせる。</p>	
まとめ 10分	<p>本日の活動の振り返り（10分）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・演習の成果について講評を行う</li> <li>・住宅設計に関する重要な視点を教授</li> <li>・次回の授業の準備を伝える</li> <li>・リアクションペーパーの記入</li> </ul>	<p>本時の学修全体を振り返らせる。</p>	<p>ワークシート及びリアクションペーパーにより、授業への積極的な態度を評価する。</p>

### **3. 成果・効果**

演習毎に発表をすることで、新たな視点や知識を得ていき、グループの案に反映させることができる。住宅設計をするために必要な考え方を段階を踏んで理解できており、コンセプトがある住宅設計ができるようになる。

### **4. 課題**

事例を通した住宅設計の初回であるため、今後どう展開していくのかを十分に理解できず、取り組んでいる。リアクションペーパーにも、「これからどうやって設計していけるか、不安」などのコメントがあり、次年度に向けて、住宅設計の全体像の説明をさらにわかりやすくしていきたい。

### **5. 資料**

ワークシート、リアクションペーパー

授業科目：	教職実践演習		
科目区分：	教職専門科目	受講者数：	9名
担当者：	門戸千幸（総合教育センター）		
アクティブ・ラーニングのタイプ：	行動型 ・ 参加型 ・ 複合型（※行動型・参加型ALを組み合わせて実施）		
キーワード（具体的なAL手法等）：	構成型ジグソー、グループ学習、ロールプレイ		

### 1. 授業の概要と目標

教員として必要な資質・能力を演習等を通して身に付ける。本時は「特別な支援を必要とする生徒への指導の在り方」について、既習の知識を活用して実践的に学ぶ。

### 2. アクティブ・ラーニング導入の具体的な流れ

○科目名 教職実践演習

段階	指導過程・学修活動	指導上の留意点（工夫）	評価方法
導入 20分	○授業はじめの挨拶  ○ショート演習「学校におけるリスクマネジメント」を考える。  ○国泰寺高校の授業参観の感想から「主体的・対話的で深い学び」について考える。	・役割演技  ・ジグソー学習によるインシデントプロセス研修  ・事例を基に小集団学修	・教員としての資質・能力(観察)  ・思考力(発言)
展開 60分	○「教育資料」から特別支援教育についてレポートを発表する。  ○特別支援教育の現状について知る。  ・インクルーシブ教育について  ・学習のユニバーサルデザインについて	・学生同士の質疑応答  ・特別支援教育に係る現状を振り返らせる。  ・教育実習での体験等を想起させる。	・表現力(発言)  ・思考力(ノート)
まとめ 10分	○特別支援教育について振り返る。  ○次回の「教育資料」のレポート課題通知。  ○授業終わりの挨拶	・各自の言葉でまとめさせる。 ・隣同士で確認させる。  ・役割演技	・思考力・判断力(ノート) ・教員としての資質・能力(観察)

### 3. 成果・効果

- 学生の主体性が発揮でき、体験によって知識がより定着する。
- 協働的な学修の意義を体得できる。
- より実践的なスキルの習得が可能。

#### 4. 課題

- 欠席者への対応。(体験によって学修する内容は資料の説明だけでは補えないものがある)

#### 5. 資料

- ルーブリック

教職実践演習自己評価ルーブリック

H.31.1.25

観点	A. 実践力	B. 応用力	C. 基礎力
【知識・技能】	国語科・社会科(地歴・公民科)・英語科及び各領域の指導等について実践的な知識と技能を身に付け、授業参観や演習の中で実践することができる。 <input type="checkbox"/> ほぼ達成 (6点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (5点)	国語科・社会科(地歴・公民科)・英語科及び各領域の指導等について実践的な知識と技能を身に付け、授業参観や演習等で関連付けることができる。 <input type="checkbox"/> ほぼ達成 (4点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (3点)	国語科・社会科(地歴・公民科)・英語科及び各領域の指導等について実践的な知識と技能を身に付けることができる。 <input type="checkbox"/> ほぼ達成 (2点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (1点)
【思考力・判断力・表現力】	模擬授業や学習指導案作成時に学習指導要領・生徒指導提要等に示された適切な学習指導・生徒指導等ができる。 <input type="checkbox"/> ほぼ達成 (6点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (5点)	授業参観や演習等において学習指導要領・生徒指導提要等に示された学習指導・生徒指導等ができる。 <input type="checkbox"/> ほぼ達成 (4点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (3点)	学習指導要領・生徒指導提要等に示された学習指導・生徒指導等が具体的な生徒の姿で理解できる。 <input type="checkbox"/> ほぼ達成 (2点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (1点)
【主体性・協働性】	模擬授業や学習指導案作成時に学校教育の全体像を見据えた学習指導及び生徒指導等ができる。 <input type="checkbox"/> ほぼ達成 (6点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (5点)	授業参観や演習等において学校教育の全体像を見据えた学習指導及び生徒指導等を確認しようとしている。 <input type="checkbox"/> ほぼ達成 (4点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (3点)	学校教育の全体像を見据えた学習指導及び生徒指導等を考えようとしている。 <input type="checkbox"/> ほぼ達成 (2点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (1点)
【教職に必要な資質・能力】	倫理観に基づき、価値観の異なる相手に対しても相手を尊重し、組織の目標達成に向けて協働することができる。 <input type="checkbox"/> ほぼ達成 (6点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (5点)	倫理観に基づき、リーダーシップを発揮してより良い学修を図ろうとしている。 <input type="checkbox"/> ほぼ達成 (4点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (3点)	倫理観に基づき、コミュニケーションスキルを発揮してチームワークを保ちつつ自己の学修をコントロールしている。 <input type="checkbox"/> ほぼ達成 (2点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (1点)

・各観点の項目について、現在の到達段階を、「A. 実践力」(6～5点)、「B. 応用力」(4～3点)、「C. 基礎力」(2～1点)で自己評価する。その際、A～Cに記述された内容について、「ほぼ達成」「半分程度達成」のいずれかを選び、にチェックを入れる。

授業科目：	留学生と学ぶ広島		
科目区分：	全学共通教育科目	受講者数：	111名
担当者：	柳川順子（人間文化学部国際文化学科）／五條小枝子（総合教育センター）		
アクティブ・ラーニングのタイプ：	行動型 ・ 参加型 ・ <b>複合型</b> （※行動型・参加型ALを組み合わせて実施）		
キーワード（具体的なAL手法等）：	フィールドワーク、グループディスカッション、プレゼンテーション、異文化交流、学修成果発表会		

## 1. 授業の概要と目標

文化的背景の異なる留学生と日本人学生とが、広島という地域への理解を深めながら、異文化間コミュニケーションの基礎を体得することを目標とする。

## 2. アクティブ・ラーニング導入の具体的な流れ

具体的な授業計画は、添付シラバスのとおり。

段階	指導過程・学修活動	指導上の留意点（工夫）	評価方法
導入	留学生と3キャンパスの学生が交流できるように、授業開始時にグループ分けを行う。 本年度は受講生が多いため、1グループ10人から12人の編成とし、計10グループとした。	グループ分けに際しては、共同作業を行う上での志向性を見る簡単なテストを行い、できるだけ多様なタイプでの編成を心がけた。 また、グループ内での役割を学生自らが考え、それぞれの分担を、話し合いで明確に決めるようにした。	
展開	本科目の最後まで、同一グループで行動する。 計3回のフィールドワークに参加する。 それぞれグループワークによって、フィールドワーク先での行動計画を作成、教員に提出する。 フィールドワーク先で得た情報や新たな発見を個人レポートにまとめた上、ディスカッションを通じて、グループとしての意見をまとめ、発表する。	グループワークを活性化させ、異文化交流を促すため、フィールドワーク活動中は、以下のことを課した。 ・各自が相談し、グループ毎に留学生と交流する上での〈話題〉をひとつ設定する。 ・どのようなことを話したか個人レポートに書けるように、必ず一度は、全員が留学生と直接話をする。	グループ発表 個人レポート を総合的に評価する。
まとめ	学期末に、広島キャンパスに一同が会して、合同発表会を実施する。	3回のフィールドワークを通じて、得たことをグループで検討し、発表する。 発表会当日は、グループ別発表の後、ランチセッションを経て、他のグループの発表を聴いた上での意見交換をし、簡単に発表する。	グループ発表 個人レポート 振り返りレポート を総合的に評価する。

		最後に、各人がミニレポートを作成する。項目は、「授業で学び得たもの」、「グループ内で果たした役割」、「グループ活動での反省点」である。	
--	--	---	--

### **3. 成果・効果**

- ・留学生との関わりや、異なるキャンパスに学ぶ学生どうしの交流を通して、多くの学生が、バックボーンの異なる他者と友好的に協力できるコミュニケーション能力を高めることができる。
- ・同じグループで行動することによって、グループ内における自身の役割を自覚的に果たしていこうとする学生が現れ、また、グループメンバーで補い合おうという姿勢が生まれる。
- ・留学生との意見交換により、日本人学生と留学生、お互いが新たな発見を得ることができる。このことを通して、異文化理解の基礎を体得することができる。

### **4. 課題**

- ・3回のフィールドワークは、後期の土曜日に実施する。他の行事との重複を避けるため、新年度前に決めるようにしているが、毎年度、集中講義や大学行事と重なり、参加できない学生が出る。本科目は、同じグループで活動することを柱としているため、同一の体験をさせることが望ましいが、それが困難になる場面もあり、苦慮している。
- ・グループ毎の行動計画が十分でないグループも見受けられるため、綿密な事前準備を促す工夫が必要である。

**5. 資料**

## 2018 年度シラバス

規開講日 付	授業		授業の内容	事前学修, その他
	回	日付		
9/28	①	9/28	授業の趣旨や概要の理解 留学生の自己紹介, 学生相互の意見交換	コースカタログ・シラバスに 目を通してくる。
10/5	②	10/5	グループ分けに向けての事前作業 第1回フィールドワークの概要を把握	グループ活動に必要な役割 を考えてくる。
10/12	③	10/12	第1回フィールドワークの事前学修	グループでフィールドワー ク計画書を作成する。
	④ ⑤	10/13	<b>第1回フィールドワーク (備北丘陵公園)</b>	グループ内で役割分担を明 確にし, 活動内容の打ちわ せをしておく。
10/19	⑥	10/19	第1回フィールドワーク振り返り	第1回フィールドワークに ついてレポートを書く。グル ープで発表の準備をする。
10/26			授業は行わないが, 自主的グループワ ークに教室を使用できる。以下同様 (*)	
11/2	⑦	11/2	第1回フィールドワークのレポート発表 会	
11/9	⑧	11/9	第2回フィールドワーク事前学修	グループでフィールドワー ク計画書を作成する。
11/16			*	
	⑨ ⑩	11/17	<b>第2回フィールドワーク (鞆の浦)</b>	グループ内で役割分担を明 確にし, 活動内容の打ちわ せをしておく。
11/21		11/21	*	第2回フィールドワークに ついてレポートを書く。グル ープで発表の準備をする。
11/30	⑪	11/30	第2回フィールドワークのレポート発表 会	
12/7			*	グループで第3回フィール ドワーク計画書を作成する。
12/14			*	
	⑫ ⑬	12/15	<b>第3回フィールドワーク (広島)</b>	グループ内で役割分担を明 確にし, 活動内容の打ちわ せをしておく。
12/21	⑭	12/21	ここまでの学修活動を振り返っての総括	第3回フィールドワークに ついてレポートを書く。グル ープで合同発表会の準備を 進める。
1/11			*	グループで合同発表会の準 備をする。
	⑮	1/12	<b>3キャンパス合同発表会</b>	
1/25			—	

授業科目：	日本国憲法		
科目区分：	全学共通教育科目	受講者数：	約 100 名
担当者：	岡田 高嘉（総合教育センター）		
アクティブ・ラーニングのタイプ：	行動型・参加型・複合型（※行動型・参加型 AL を組み合わせて実施）		
キーワード（具体的な AL 手法等）：	グループワーク、ディスカッション、プレゼンテーション		

## 1. 授業の概要と目標

### 【概要】

この授業では、憲法の核である人権保障と統治機構の概要を習得し、現代社会が直面している憲法問題を考察する法的思考能力の一端を養うことを目指す。

授業のおおまかな内容は、憲法を支える立憲主義の思想の歴史的展開を概観し、次いで日本国憲法が規定する基本的人権の具体的内容と統治機構について解説する。

### 【目標】

知識・技能の観点

- 1 憲法の存在意義を説明できる。
- 2 基本的人権の内容を説明できる。
- 3 権力分立の意義と統治構造を説明できる。

思考・判断・表現の観点

- 1 現代の社会問題を憲法と関連づけて考察することができる。
- 2 直観に頼らず、法的な思考を用いて説得力ある論述ができる。

主体性・協働性の観点

- 1 テレビや新聞等で見聞きする社会問題に関心を持つことができる。
- 2 専門分野にとらわれず、幅広い知識と柔軟な思考の大切さを自覚できる。
- 3 他者と協働して課題に取り組むことができる。

## 2. アクティブ・ラーニング導入の具体的な流れ

○科目名「日本国憲法」 第13回 授業テーマ「国会と立法権」

段階	指導過程・学修活動	指導上の留意点（工夫）	評価方法
導入 15分	前時の内容の振り返り（8分） 本時の目標の理解（7分） 板書「国会議員選出に関する課題を理解する」	本時の学修の流れと目標を理解させる。	
展開	基本事項の説明（20分）  個人学修 2017年総選挙の資料（政党別の得票率・議席占有率など）から、選挙制度の問題点を考える（10分）		

60分	<p><b>グループワーク</b> 2人～4人でグループを形成し、ディスカッション（15分）</p> <p><b>発表</b> ランダムにマイクを回し、グループの考えや個人の考えを発表してもらい、クラス全体で共有する（15分）</p>	<p>発表してもらったグループを決めて、当該グループの活動に積極的に関与</p> <p>発表内容を肯定的に受け入れ、決して否定的なことを言わない。適宜補足説明を行う。</p>	
まとめ 15分	<p>本時の活動の振り返り（10分）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・投票権保障の趣旨</li> <li>・民意を反映しうる選挙制度</li> </ul> <p>レポート課題の説明（5分）</p>	<p>本時の学修全体を振り返らせる。</p> <p>本時の学びをレポート（文章）で総括させる。</p>	次回に提出されるレポートで評価

### 3. 成果・効果

グループワークに入る前に、学生が個人的に課題に向き合う時間をとる（個人学修）。その成果を持ち寄り、グループワークを開始する。そうすることでワークは活性化する。ワークシートには、ディスカッションのプロセスと共に、グループとしての結論が記載される。ワークが捗っていないと認められるグループに対しては、積極的に関与するよう心がけている。

アクティブ・ラーニングの導入が奏功したためか、最近では全体的に最終的な成績が向上していると認められる。その理由としては、①課題レポートを多く出し、書く機会を増やしたことで、学生が論述になれたこと、②グループワークなどで学び合いが一定程度機能したこと、これらの結果、総じて③学生の学修時間が増えたことが原因ではないかと推察している。

### 4. 課題

近年、グループワーク等を活用することが多くなったためか、「総合的な授業満足度」など重要な項目の数値が少し改善したと認められる。また、自由記述欄における否定的なコメントが減って、肯定的なコメントが増えたことは非常に喜ばしいことであり、授業改善へのさらなる動機づけとなる。

学修成果は全体的に少しずつ向上していると認められるものの、ワークシート及び口頭発表から個別具体的に学修成果を評価すれば、まだまだ不十分な点が多いと感じる。ディスカッションが皮相的であるためか、口頭発表ではごくありふれた常識的なことを述べるだけで終わることが多い。課題レポートに関しても、授業の内容がほとんど踏まえられていないレポートや、憲法論や法律論ではなく、むき出しの感情論に終始するレポートが存在するのも厳然たる事実である。

事前準備の仕方や授業設計に問題があると考えられるので、引き続き改善を行っていきたい。

### 5. 資料

科目ループリック

「日本国憲法」科目ルーブリック

要素	段階	A+	A	B	C	D	評点
		4点（目標以上）	3点（目標達成）	2点（あと少し）	1点（まだ足りない）	0点	
主体的な学修態度		授業内容や関連する新たな内容に対して興味・関心を持ちながら、重要度の高い社会問題を発見し、その問題解決のために、常に主体的に学び続けることができる。	授業内容や関連する内容に対して興味・関心を持ち、常に主体的に学ぶことができる。	授業内容に対して興味・関心を持ち、主体的に学ぶことができる。	授業内容に興味・関心があるものの、あまり主体的に学ぶことができない。	授業内容に関心がなく、主体的に学ぶことができない。	
関心・意欲（授業の予習・復習、新聞やニュース等を見る時間／週）		4時間以上 (240分以上)	3時間以上 4時間以下 (180分～240分)	2時間以上 3時間以下 (120分～180分)	1時間以上 2時間以下 (60分～120分)	1時間以下 (0分～60分)	
憲法に関する知識		憲法の存在意義、人権保障の概要、統治の仕組み（権力分立）について、詳細かつ明確に説明できる。	憲法の存在意義、人権保障の概要、統治の仕組み（権力分立）について、一通り説明できる。	憲法の存在意義や人権保障の概要を一応説明できる。	憲法とは何か、憲法の存在意義を一応説明できる。	憲法とは何か、憲法の存在意義が説明できない。	
法的思考力		憲法の知識を用いて、冷静かつ論理的に多様な観点から社会問題を分析し、説得力ある形で自分の考えを述べることができる。	憲法の知識を用いて、冷静かつ論理的に様々な社会問題を分析することができる。	社会問題と憲法との関連性に気づくことができ、その問題を憲法の知識を用いて考察することができる。	憲法の知識を用いた思考が時折できるが、基本的に直観思考や個人的な経験に頼っている。社会問題と憲法との関連性がまだつかめない。	直観や個人的な経験でしか物事を考えることができない。	
協働性		グループ（ペア）での話し合いをリードし、話し合いを進展させるような建設的発言を積極的に行っている。	グループ（ペア）での話し合いにおいて積極的に発言を行っている。	グループ（ペア）での話し合いにおいて、時折、関連する発言を行っている。	グループ（ペア）での話し合いに形だけ参加している。	グループ（ペア）での話し合いに参加していない。	

合計 \_\_\_\_\_ 点